
私と姉さんと召喚獣

秀吉組

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と姉さんと召喚獣

【Nコード】

N9224T

【作者名】

秀吉組

【あらすじ】

霧島翔子の妹 霧島夢希が姉の霧島翔子と同じ文月学園に編入してくるところから物語が始まる

主人公設定（追加設定しました）（前書き）

この作者は全くの素人なのでキャラクター設定がおかしなところや誤文などあるかもしれませんがどうか暖かい目でみてやって頂いたら幸いですm（＿）m

主人公設定（追加設定しました）

主人公説明

名前 霧島 夢希

（きりしま ゆき）

身長は姉の翔子と同じくらいで普段は髪型はポニーテールしているが髪を下ろすと瓜二つの姉妹のため姉の翔子と見分けがつかなくなる。唯一雄二だけ見分けがわかる。

性格 姉の翔子に比べると活発で姉の魔の手（笑）から雄二を守るうとして見えるが実はそれ以上に状況を悪化させる天使の姿をした小悪魔な性格。しかし好きな人の前だと顔を真っ赤にさせ恥ずかしがったり困ってる人を見たら見捨てることが出来ない一面も持つ。
趣味 ポイントカードのポイントを貯めること

ウィンドウショッピング

お菓子作り

カポエラ

翔子が祐二の目潰し等攻撃的な所を見るとこ

好きなこと 秀吉と過ごす時間

姉と雄二のいちゃいちゃしてるところ（拷問も可）を見ること

友人達とわいわい騒ぐこと

嫌いなもの 秀吉を傷つけるもの 姉を傷つけるもの

概要 幼い頃は病弱で治療のために翔子とは離れて暮らしていたが完治しました姉と暮らしたいと思い帰ってくる。雄二とは幼なじみの関係。秀吉とは治療中の滞在先で出会い夢希を励ましてくれた相手です。その時夢希が一目惚れ今でもずっと想いを寄せている。

普段は隠しているが強力な蹴り技を持っている。

一話 学校初日（前書き）

なんだかゴタゴタな作りになってしまいましたが暖かい目でみてやって下さい（・・・；）

一話 学校初日

「ここが文月学園か」

校舎へと続く両脇を桜が咲き誇っている坂道を上がるとその建物はあつた。

今日から私が通う学園、私が大好きな姉さんが通う学園、そして、私を励まし生きる希望を与えてくれた人、私の初恋の男の子木下秀吉君がいる学園……、秀吉君…私のこと覚えてくれてるかな？……それとも忘れちゃったかな？と思いこにふけながら校舎の入り口に入ろうとした時

「そこのお前、ちょっと待て」

と呼ばれたので振り返ってみるとそこには

浅黒い肌をした短髪のスポートスマン然としたマッチョさんがそこにいました。

「あ、あの、ど、どちら様でしょうか？」いきなり現れたマッチョさんに私は驚きを隠せないまま質問していた。

「ああ、驚かせてすまん。俺は西村 宗一この学園の生活指導担当の教師だ。お前が編入してきた霧島夢希だな？」

…まさか出会い早々一発目からこんな濃い先生に会うとは流石文月

学園。普通の学校とは一味違うということですか；

「うん？どうかしたか？」

「い、いいえ！なんでもありません！霧島夢希です！よろしくお願いします！」

「？まあいい、それより、ほら、編入試験の結果だ受け取れ」

先生が懷から封筒を取り出し、私に差し出してくる。宛名には「霧島夢希」と書かれてあった。封筒を開け紙を開くとそこには

「霧島夢希 Aクラス」

と書かれていた。

私の文月学園の学生生活の初日が始まるうとしていた。

一話 学校初日（後書き）

感想や誤文字とかありましたらメールを送って下さいm
m（――）

二話 学校初日その2（前書き）

今回はちょっと長く書いてみました。相変わらずのゴタゴタな作りですが暖かい目でみてやって下さいm（―）m

二話 学校初日その2

霧島夢希 Aクラス

「よかつたなAクラスに編入出来て。Aクラスにはお前の姉の霧島翔子もいるぞ。が、この結果に慢心をせず、常に己を研鑽する事を忘れんようにな。」

とマッチョ、いや違った・西村先生が自分のことのように喜ぶように私のAクラス編入を祝ってくれた。

「は、はい！ありがとうございます！」

姉さんのことだからAクラスなのは予想できていた。姉さんと同じ文月学園に編入するのだからどうせなら姉さんと同じクラスになりたいという一心で猛勉強を頑張ってきた。猛勉強の末にこうして晴れてAクラスになれたのに、努力が実ったことが本当に嬉しかった！

10

…ま、まあそれで秀吉君と同じクラスになれたら最高なんだけども
くと思っていたのは秘密である；

「では、これから職員室に案内するのでついて来るように」

「はい！」

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

「職員室には担当の高橋先生がいるので高橋先生の指示に従うように。では、俺はここで失礼するぞ。これを渡さなきゃならんバカが一人いるのでな」と西村先生は一つの封筒をヒラヒラさせながら去っていった。

私は去って行く西村先生に一礼すると職員室の扉を開いた。

「し、失礼しまーす；」

「お待ちしていました、霧島夢希さん。私がAクラス担当の高橋洋子です。よろしくお願いします」

職員室に入るとそこには髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきっちり着こなした知的女性の代表な先生がいた。綺麗な女性^{ひと}だな、あれが眼鏡美人ていうのかな？なんて考えていると「ん？どうかしましたか？」

「ふえ？あ、いいえ！？何でもないです・霧島夢希です！よろしくお願いします；」

いけないいけない；考え事するとつい止まっちゃうな私；

「そのソファーに座って楽にしてください。ふふ、そう緊張しなくてもいいですよ。」

「あ、はい；」うつ、緊張していることバレて気を使われてしまった…恥ずかしい；

「では簡単にこの学校について説明しますね」

「はい、お願いします」

私は高橋先生からこの学校の特徴 召喚獣その召喚獣を使って行う試験召喚戦争 そしてその戦争の勝利のメリットと敗北した時のデメリットの説明を受けた

「では、そろそろ教室のほうに移動することにしましょう。」

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

「では、外で待っていて下さい。Aクラスの生徒と少し話をしたら呼びますので呼ばれたら入って来て下さい」高橋先生はそうとAク

ラスに入っていった。しかし何だろうこの広い教室にこの設備は；。壁を覆うほどのプラズマディスプレイにノートパソコンに冷蔵庫、リクライニングシートなど他にも色々な設備がありまるで高級ホテルだよこれは；と唖然としている所に「どうぞ、入ってきて下さい」と高橋先生の声が聞こえた。…この教室に姉さんがいるんだ。ふふ、姉さん驚くだろうな、なにせ私がこの文月学園に編入することはおろか帰ってくることも伝えてないのだ！いわゆるドッキリを決行しようとしているのだw 私はポニーテールにしていた髪を解き髪を下ろし無表情を装って教室に入った。

教室に入ってみると予想通りの反応が起こっていた。

「え！？代表？代表が二人？」

「え！？……夢希？」

私はクラスの反応と姉さんの反応を見ると無表情から一変して笑顔でこう言った

「今日からこの文月学園に転校してきた霧島翔子の妹の霧島夢希です！よろしくお願いします！」

二話 学校初日その2（後書き）

感想おまちします

三話 学校初日その3（前書き）

ちよつと翔子の設定が変わってるかも知れませんが暖かい目でみて
やって下さい

三話 学校初日その3

「……………ぶす（「3」）」

「機嫌直してくださいよ、姉さん；」

私のドッキリ作戦は見事成功したのだけどご覧の通り姉さんが拗ねてしまいました。姉さん、自分は怒ってるんだぞという顔をしてるつもりなんでしょうが可愛すぎです姉さん！と言うと余計拗ねちゃうので言いませんが…

「……………いつ、こつちに帰ってきたの？」

「え、えくと昨日の晩には（「ハハ」）」

「……………教えてくれたら迎にいったのに」とまた拗ねちゃう姉さん；
。なんとか機嫌を直して貰わないと；

「で、でも今日からまた同じ学校で学生生活を送れますよ；」

「……………また、一緒に暮らせる？」

「はい、姉さん」

「……………おかえりなさい、夢希^{ニコ}」

「……………ただいまです、姉さん（ニコ）」

なんとか姉さんの機嫌を直せてホッとした所に「いや、本当にそつくりだよ、どつちがどつちなのか分からないよ」と言われて振り返ると色の薄い髪をショートカットした、ボーイッシュな女の子がいました。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「霧島夢希です。こちらこそよろしくお願いします」

「さっきの話ちょっと聴いちゃったんだけどまた一緒に暮らせるとか言ってたけど離れて暮らしてたの？」と工藤さんがきいてきた。

「私、幼いころは病弱でその治療のために姉さんとは離れて暮らしてたんです」

「そうだったんだ…、で、もう身体は大丈夫なの？」

「はい！もうすっかりと」

「そうなんだ、あれ？離れて暮らしていた妹との感動の再開の割には代表、その、なんというかリアクション低くない？」

「ああ、確かに離れては暮らしてましたけど連絡は取り合ってたんですよ。手紙とか携帯のメールやらあとテレビ電話とかで。だから」
「…………でも一緒に暮らすのと離れて暮らすのでは違うこともある」

寂しいと言おうとしたら姉さんが横からこう言ってきた…しかし、

「…………でも夢希は帰ってきてくれた。また一緒に暮らせることが出来て私は本当に嬉しい」と嬉しそうに言ってくれた。

姉さん寂しいかったんだな、でもそう言ってくれてとっても嬉しかった。…………私も寂しかったのかな…

「本当に仲のいい姉妹だね」

「…………私たち最強姉妹（Vサイン）」

「あはは、そう言ってもらえると嬉しいです工藤さん」

「愛子でいいよ、あと敬語もなし。私たち同じクラスメートなんだからね！だから私は夢希と呼ばせてもらうから。改めてよろしくね、夢希」

「ええ、よろしくね愛子」と会話が盛り上がってきたその時

「あら？何の話してるの？代表、愛子」

「……え!？」

そこには想いを寄れる人と同じ顔をした女の子がそこにいた。

三話 学校初日その3（後書き）

翔子がシスコン気味に（＾―＾；）

感想おまちしてます

四話 学校初日その4（前書き）

前回長く書いてみたら思いのほか疲れたのでこれからはマイペースで書いていこうと思います m (_ _) m

四話 学校初日その4

「あら？何の話してるの？代表、愛子？」

「え！？」

そこには想いを寄せる人と同じ顔をした女の子がそこにいた。

「ひ、秀吉君！？……な、何故女子の制服を？」と私が言うと

「…慣れてるけど、あのバカと同じ目で見られるのはムカつくわね、慣れてるけど（小声）はあ、まあ双子の姉弟なんだから仕方ないかと秀吉君（？）は溜め息混じりに呟いていた。

「あの～秀吉君じゃ？」と聞くと

「残念だけど私は秀吉じゃないわよ。私は木下優子、木下秀吉の姉よ。ちなみにうちの弟なら最低クラスのFクラスよ」

「ええ～！？秀吉君にお姉さんいたんですか～！見分けつきませんでしたよ！」
と言うと

「あ、あのさ、そのセリフ、あなたには言われたくないんだけど…」

あ、そうでした…私たちも、双子なんでした…

「す、すみません；見間違えちゃって；私、霧島夢希です、よろしくお願いします；」

私は木下さんに謝りながら自己紹介した。

「ああ、別にもういいわよ。慣れてるから（小声）。こちらこそよろしくね。あと私も優子でいいから。ところでどうしてあれのこと知ってるの？」と聞いてくると

「あ、ボクも聞きたいな、優子の弟君とはどうゆう関係なのかな？」

「……私も詳しく聞きたい」

う、愛子ちゃんや姉さんまで聞いてきました；

「あ、あはは、そこは乙女の秘密ということではダメですか；？」

『　　だめです　　』

即答ですか（。□。；）

じわりじわりと迫る三人の悪魔（？）落ち着つきま……ちょ……待つ……、
い、いや……

秀吉君との出会いや秀吉君に一目惚れしちゃったなど全て知られてしまいました；

四話 学校初日その4（後書き）

感想待ってます（T-T）

五話 私とあの人が出逢うとき（前書き）

相変わらずのゴタゴタな作りですが暖かい目でみてやって下さい m
（ ） m

五話 私とあの人が出逢うとき

色々聞かれて思い出した、思い返すように私は秀吉くんと出逢ったあの日のことを振り返っていた。

三年前の春、私は公園のベンチでふて腐っていた。

「やっぱりもう無理なんだよ……歩くことなんて……」

私が中学一年の時に病氣にかかり、治療のために実家を離れた大きい病院で治療していた。

二年の歳月をかけて病氣は治療出来たのだがお医者様によると「治療は出来ましたが治療するまでの間に身体の筋力が大幅に下がっています。リハビリで身体を戻していくしかありません。リハビリははやく直したいということ本人の意志が大きく関わってきます」と言われた。

最初のうちははやく直すぞという意気込みでリハビリに望んでいたがなかなか動かない自分の身体、上手くできないリハビリなどでどんどん意気消沈していき、ここ最近では絶望感も始めあまりリハビリをしていなかった。

気分転換を進められ車椅子で来た公園のベンチでかつての自分を思

い出したり、リハビリがうまくいかない悔しさや、無気力な自分が情けなくなり泣きそうになった、その時だった

「どうしたのじゃ？どこか痛いのかの？」

とちよつと普通とは違う口調で心配そうにこっちを見つめる女の子のような顔つきの男の娘がそこにいた。

「え？男の娘？」と知らずに呟いていると

「お、お主！儂が男だとわかるのか？」と少々興奮気味に聞いてきた。

「う、うん…そうだけど？」と答えると

「う、嬉しいのじゃ！儂のことを一目で男だとわかってくれるのはそうはいないのじゃ！」とあまりにも嬉しかったのだろう、涙目で熱く語ってきた。

……どうしよう、今の目の前のこの子を見ると「やっぱり女の子に見えたよ」と言い出しそうな自分がいる…と葛藤していると

「ところでどうして泣いておったのじゃ？もし良かったら儂に話し

てはもらえんかの？（二「」）

「……！！！！？」その男の子（娘？）の笑顔を見た瞬間顔が暑くなつて心臓がドキドキと激しく鳴り始めた。

私は慌てて顔を背けると落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせた。ようやく落ち着いて顔を戻すと彼は黙って私が言い出すのを待っていてくれた。

思い切って話してみようと思って口を開くと自分の病気のことやリハビリが上手くいかなくて悩んでいることなど自分でも不思議なくらい話していた。話している途中さつきまで我慢していた涙がポロポロと出てきて抑えることができなかった。

そんな私を彼は黙って話を聞いていてくれた。

話終わると黙ってポケットからハンカチを取り出すと涙を拭いてくれた。

「あ、ありがとう（〃〃）」

「……そのリハビリ儂も手伝ってもいいかの？」

「えー！？」

「そのかわり、儂の練習を手伝ってくれんかの？」

「れ、練習ってなんの？」

「儂は演劇をやっておつての、一人で発声の練習とかしておるのじやが誰かにちゃんとできておるか見て欲しいのじゃ、だめかの？」

「いいけど、そのくらいで私のリハビリ手伝ってもらうの悪いし、それに、その……私たち初対面だし」

「なに、これも何かの縁じゃ！……だめかの？（上目使いで）」
う、その顔でその上目使いとは、卑怯じゃないかな””

「え、え〜と、じゃあ、お願いしてもいい？」

「うむ！お、そうじゃまだ名を名乗ってなかったの。僕は木下秀吉じゃ」

「わ、私は霧島夢希」

「よろしくなのじゃ」

「うん、よろしくね！」

これが秀吉君との出逢いでした。

五話 私とあの人が出逢うとき（後書き）

過去話は難しいですね（^ー^；） 次回に続きます

私とあの人が出逢うとき（その2）（前書き）

過去話はなかなか難産で難しい（・・・）相も変わらずのゴタゴタな作りですがみてやって下さい

私とあの人が出逢うとき（その2）

秀吉君との出会った次の日からお互いの練習が始まった。

「う、くっ、んぐ」

「慌てなくてよいからまずはゆっくりと」

今私は車椅子から立ち上がって、両手を手すりに捕まって右から左、左から右と行き来していた。

秀吉君はそのたびに私の行く先に居て、励ましてくれたり私が倒れないように見てくれている。

「さつきより、上手くなってきたのじゃ」

「本当！？よし、それならもつとペースを上げよう！」

「そろそろ休んだほうがよいぞ？もう何時間も練習しておるのじゃぞ？無理は禁物じゃ」

「大丈夫だよ！」と言ってまた歩き出そうとした時、まだ動き慣れてない足を無理に動かそうとしたため足が躓き、踏ん張ることが出来ない私は来るであろう痛みに備えて目を閉じた……

一向に痛みが来ることがなかった。その代わりに来たのは暖かい感触だった。目を開けてみると

「ふゝ、ギリギリ間に合ったのう。怪我とかないかの？」

そこは秀吉君の腕の中でした（〃〃）

「う、うん、ありがとうね（〃〃）大丈夫だから」と激しく鳴り始めたドキドキを鎮めるために静まれ静まれと念じていると

「なんじゃ？顔が真っ赤じゃぞ？体調でも崩してしまったかの？」
と私の額に手をおいていた；

「だ、大丈夫たら大丈夫だよ；体調も崩してないから！うん平気だから！」と少々テンパリながら答えると

「そうかの？ならよいが、さっきみたいになつては駄目じゃから休憩じゃ！よいな？」とちよつと強めに言われちゃったので大人しく従うことにした。

「それじゃあ夢希が休憩してる間儂の練習を見て貰おうかの、よいかの？」

「うん、喜んで！でもどんなことするの？」

「なに、そう難しいことではないのじゃ、あいうえお順に発音していくのでそれを聴いておかしなところがあつたら教えて欲しいのじゃ」

「でも、私そういうのよく分かんないよ？」

「はは、別に難しく考えなくてもいいんじゃない、なんとなく感じた程度でよいのじゃ」

「そうなんだ。うん、わかった」

それから私は秀吉君の発音の練習に付き合つた。秀吉君の声はとっても綺麗で目を閉じて聴いていた。

「どうだったかの？おかしなところはなかったかの？」

「うっん、全然！とっても綺麗な声に発音と言つことないよ」と言つと

「そ、そうかの・そう言つて貰えると嬉しいのじゃ（〃〃）ありがとうのう」と恥ずかしそうにお礼を言つてきた。ああ、そんな仕事をするから女の子に見えちゃうんだよ」と言いそうになったのは秘密である。

「あとこんなのも出来るのじゃ」というと少し息を吸うと

「お前のやったことは、全部まるっとお見通しだ！」とあるインチキマジシャンが主人公のドラマの名台詞を言つた。

「す、凄いよ！本物と見分けつかないほど瓜二つの声だったよ！」

「声真似は儂の十八番じゃからな！」

こんな風に楽しくリハビリの日々は過ぎていった。ひとりでリハビリしていた時とは想像出来ないくらいにリハビリが進んでいた。これも秀吉君のおかげだと思う。……そして秀吉君のことが好きだとおもつ（〃〃）多分最初に会ったときに一目惚れしちゃったのかな；告白とかどうしようかなと考えていた時

終わりは突然やってきた。

私とあの人が出逢うとき(その2) (後書き)

まさかまだ続くとは(。□。;) 次回で過去話終わる……予定で
す…多分

私とあの人が出逢うとき（その3）（前書き）

感想送ってくれた方々ありがとうございます（＾Ｏ＾）励みになりますのでこれからもよろしくお願いします。グダグダな作りですがどうぞ

私とあの人が出逢うとき（その3）

「今日で…お別れなのじゃ」

いつものように秀吉君に会つと、そう申し訳なさそうに、そして、悲しそうにそう言った。

ここに滞在していたのは家の事情で来ていたらしく、家の用事が済んだので帰らなくてはならなくなつたらしい。

「そうなんだ……、そ、それなら仕方ないよね……」

「すまぬのじゃ…最後まで手伝うことが出来なくて…」

本当に申し訳なさそうにしている彼の顔を見るのが辛かった…、あの楽しかった時間はもう終わってしまうのかと思うと悲しくなった。

私は秀吉君に心配させまいと気丈に振る舞つて話を変えた

「あ、あのさ、秀吉君はどこに進学するの？歩けるようになったらさ、遊びに行くからさ」

その後秀吉君が何か言っていたけど聞こえなかった。顔は平気そうに装えても心はもう限界にきていた。秀吉君に告白も出来ないままもう会えないのかと心が悲しみに包まれようとしていた

「僕は文月学園に進学するつもりじゃ」
その一言を聞くまでは……

「文月学園！？それ、本当？秀吉君！」

「う、うむ；学費が一般よりも安いようじゃし、なにより普通の学校とは何か違うことがあるらしいしの」

文月学園……以前姉さんと電話で話していた時姉さんが進学する学校として名前が挙がっていたのでその存在は知っていた。その文月学園に秀吉君が進学する！それを知ったとき私の中で既に悲しみはなくその代わり喜びと3つの目標が出来た。

「実は家族に待ってもらってここに来たのじゃ…、そろそろ行かねばならん。夢希、げんき」

「秀吉君！」

だから私は「さよなら」ではなくこう言った。

「秀吉君！」「またね！」「」と

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

「3つの内の2つ、身体を思いっきり動けるようにすること、文月学園で姉さんと同じクラスになること。この2つはなんとか達成、あとは」

「あとは何なのかな？」といきなり後ろから現れた愛子・心臓に悪いよ；

「そ、それは、その…、ひ、秘密！（〃〃）」

「えゝ、教えてよゝ夢希ゝ」

「甘えた声出してもだめゝ」

三つ目の目標は秀吉君と再開して告白すること！ この恋が叶いますように！

私とあの人が出逢うとき（その3）（後書き）

と、とりあえず過去話終了です・なにか強引なところもありましたがご容赦を（。□。；）

第六話 学校初日その5（前書き）

書いては消して、書いては消してと少しスランプ気味でしたがなんとか形になりました（。□。；） 作りは相変わらずのグダグダですが、良かったら見てやって下さい

第六話 学校初日その5

「それじゃあ、そろそろ愛しの秀吉君に会いに行くのかな？夢希」

昔のことを色々聞かれた（尋問に近かったような気がするが）後、愛子がニヤニヤと私に聞いてきた。

「う、うん。（〃〃）で、でも向こうは私のこと覚えてないかも知れないし、それがちよつと怖いんだ」と不安そうに言う

「だーいじょぶだよ！ボクはまだ、木下君にあったことないけど聞いた限りじゃ誠実そうだし、何より押し潰されそうな夢希を見て声をかけてくれた、夢希は夢希で木下君を男の子として認めた。認めてくれた事そんなに嬉しかったなら向こうもきつと覚えてるって」と愛子が私の不安を振り払うように言うてくれた。

「うん、ありがと。少し勇気出たよ！……Fクラスに行つて来るね！」

「残念だけどそれは無理よ」と振り向くとプリントの束を持った優子がいた。

「優子、どうして無理なの？」

「FクラスがDクラスに宣戦布告したからFクラスとDクラスで戦争が起こるからよ。その間私達は自習よ」と持っていたプリントの束をペラペラさせてそう言った。

「ありやあゝ、残念だったね、夢希」

「仕方ないよ、召喚戦争中は他のクラスは手出し無用だしね」

「ところでFクラスとDクラスどっちが勝つと思う？」と愛子が聞いてくると

「私は是非ともDクラスに勝って貰いたいわ！なんの努力もせずに設備を変えようなんてそんな虫のいい話はないわよ」と機嫌悪そうに優子が答えると愛子は

「FクラスはDクラスとの戦力差を知ってるはずだからなにか意外な切り札を持つてるかも！という訳でボクはFクラスかな」

「……私はFクラス」

「うわ！？……代表いたんだ；」いつの間に後ろにいたんですか；姉さん；

「Fクラスの代表は雄二、あの雄二が何の策もなく戦争を起こすなんて有り得ない。だから必ず勝てる切り札を持つてる」と姉さんは自信に満ちた顔で答えた。

「え？Fクラスの代表で雄兄なんですか？姉さん」

「うん、Fクラスの代表は雄二」

Fクラスの代表はあの雄兄だったのか、だったらこの戦争の勝敗は分からなくなった。かつて神童と呼ばれたことがある雄兄のことだ、姉さんのいう通り何の策もなく仕掛けるなんて有り得ない。なにか有るのは確かだろう。あ、ちなみに私が雄兄と呼んでいるのは幼い時にお兄ちゃんみたいな存在だったのでそう呼んでいて今に至るという訳です。って誰に説明してるんだろ、私；。

「私の予想は「Fクラス（だよね）」（でしょ）（…）」（…あう…）」
何故か言う前に言われてしまった。

「好きな人に勝って欲しいってのが恋する乙女の考えだしね」（
コクコク）

と言う愛子に頷く姉さん。

「べ、べつにそう言う意味で言った訳じゃ…」

「顔真っ赤にしてそう言っても全然説得力ないわよ、夢希」と反論
しようとした所を容赦なく潰す優子；

「はいはい、余計なおしゃべりはここまで。自習のプリントやるわ
よ」

『はい』と言うと私達は自習のプリントをやり始めた。プリントをやりながら秀吉君達が勝つように祈ったのはないしょ（〃〃）

下校時間になり、Fクラスは下校中の生徒に混じっての戦闘を開始した。Fクラスの皆がDクラスの面々を取り囲み、次々と討ち取っていたがDクラスの本隊が動く状況は一変した。

「本隊の半分はFクラスの代表を狩りにいけ！他のメンバーは囲まれているやつを助けるんだ！」

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人ごみに紛れて攪乱しろ！」

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けはない！追い詰めて討ち取れ！」

「どうやら、Fクラスが追い詰められてきたようね」と優子が戦局見ながら言つと

「でもDクラスが追討にかかった分、戦力が分散してDクラスの代表の防備が手薄になったから奇襲を仕掛ければまだ勝ってるかもしれないよ！」私がそう反論すると

「夢希、クラスの代表はそのクラスの最高成績者なの。Fクラスの本隊が囲まれて動けないこの状況で単独でDクラスの代表を打ち取れる戦力がFクラスにあるのかしら？」とすかさず反論してきた。確かにその通りだ、雄兄がいる本隊はDクラスに囲まれて動けないし、ほかのメンバーも、個人同士の対戦にもつていかれ次々と戦死していく状況。万事休すかと思われた時、木刀を持った召喚獣を連れたFクラスの男子が奇襲を仕掛けようとしたが、近衛部隊に阻まれて失敗に終わってしまい、今度こそ終わったと思ったが気がつく。とDクラスの代表の後ろにピンク色の背中まで届く柔らかそうな髪をした女子生徒がそこにいて、床から魔法陣が現れDクラスの代表と戦闘を開始

『Fクラス 姫路瑞希 VS Dクラス 平賀源二
339点 VS 129点』

一撃でDクラス代表を下して、戦いに決着がついた。

第六話 学校初日その5（後書き）

感想お待ちしています。励みになりますのでよろしくお願いします
m ((m

第七話 再会（前書き）

おかげさまでPVアクセス1万を超えました！これも見て下さる皆様のおかげです！ありがとうございますm（＿）＿（＿）m
作りはグダグダなお話ですがこれからも見てやって下さい

第七話 再会

「姫路さん！？どうして姫路さんがFクラスに？」優子が大声だして驚いていた。

「え？そんなにすごい人なの？」と私は愛子や姉さんに聞いてみた

「うん、入学して最初のテストで学年二位を叩き出したからね」

「……その後のテストにも上位一桁以内に常に名前があつた」

最初のテストでいきなり学年二位で、しかもその後のテストも上位一桁をキープ！？；なんでそんな凄い人がFクラスにいるんだろう？

「あの話、本当だったみたいね」優子がなにかを思い出したように言った

「あの話？優子何か知ってるの？」

「聞いた話なんだけど、姫路さん振り分け試験の途中で高熱出しちゃったみたいでね、それで試験途中で退席して無得点扱いになったみたいなの」それを聞いて、理不尽だと思った。具合が悪くなつて退席するだけで無得点扱い。それはあんまりだと思っていると

「確かにテストに備えて体調管理も重要だとはおもうけど、体調を崩して退席で無得点扱い、てのは理不尽だとは思うけどね。まあ、それがこの学園の方針なら仕方ないんだけどね」と意外にも優子がそう言っていた。

「へ」

「な、なによ？」

「いや、意外だな」と思って優子なら「体調管理が出来ないのが悪い！」とか言うのかなと思って」

「あ、あのね・私だつて鬼じゃないの？；そりや常日頃体調管理には気をつけなきゃいけないけど、完璧な管理なんて出来ないし、小さなきっかけで体調を崩すことだってあるしね。そういった時は再試験とかあればいいんだけどね」

「優子つて、なんだかツンデレみたいだよな」

「な、なに言ってるのよ！？」

「厳しいこと言ってるな」と思ったらさっきみたいに優しいこと言ってるし」

「別に厳しいことなんて言っていないし、姫路さんのことを言ってるんじゃないんだからね！勘違いしないでよね！」

「まさにツンデレそのものじゃないですか」^{うん}と言つと

ぶるぶるぶる （身体が震えてる）

あ、まずい・弄る加減間違えたか・こうなってしまったら私が取る方法はひとつ！

「人をからかうのはいい加減にしなさい！」

「うん、ごめんなさい」

急いで鞆を取ると全力で教室を抜け出した；

その後　なんとか逃げ切り、気がつくやうに屋上に居た。ま、まさかあそこまで追って来るなんて今日ほどリハビリを止めずに頑張った自分を誉めてやりたいと思ったことはなかった；

「しかし、ここ眺めいいな、夕日は綺麗だし、風も気持ちいい」
うーんと背を伸ばし流れる風を身体で感じていると屋上に上がってくる足音が聞こえた。もしか、優子！？と思い急いで隠れると

「やれやれ、今日のDクラスとの戦争でだいぶ時間を取られたのう。今日は発声練習だけであがるかの」

再会を夢見た相手がそこにいた

ひ、秀吉君！？；な、なんて声掛けよう…と思いながらも思い人の顔をこっそり見ていた。

昔に比べて一段とカッコ良くなって、また一段と、お、女の子ぽくなっちゃってました；

もう少し見ようと近付こうとしたとき、恐らく、ここで誰かが飲んでいたのだろう、空き缶を蹴って音を出してしまった。

「誰じゃ！？誰かおるのか？」

気付かれてしまった私は気まずい顔をしながら

「あ、あはは…こ、こんにちわ！」とこれまた気まずい挨拶で前に出た。

「お主は、Aクラス代表の、霧島？　じゃがなにやら感じが違うよな？」

どうやら姉さんと勘違いしているみたいだ。多分優子に追いかけて
れている時に髪留めが外れて髪が下ろしてしまったためだろう。で
も！…こういう時は一発で見分けて欲しい；

うう、姉さんと瓜二つなこの容姿が恨めしい；…姉さん悪くないけ
ど；

なんとか気付いて貰わないと！…と思い

「昔みたいにインチキマジシャンが主人公の、あの名台詞言える？
秀吉君」と

もし、あの大切な思い出を忘れられていたらどうしようという不安
を隠しながら言うと

「もちろんじゃ！…って、どうして、お主が……え？」

「久しぶり、秀吉君」と私は髪を元のポニーテールに戻しながらそ
う言った。

第七話 再会（後書き）

感想おまちしております（＜―＞）

再会 その2（前書き）

普通免許の学科試験で投稿が遅れました・結果は…察してやって下さい；仕事がある身で平日休んで行くのは少々キツイですね；なんとか出来ましたので見てやって下さい

再会 その2

「も、もしかして、夢希、なのかの？」と驚いた顔で秀吉君が聞いてきた。

「うん、そうだよ！久しぶりだね、秀吉君」と満面の笑みでそう答えた。

「足のほうは、もう良いのか？」心配そうにそう聞いてた。あー！もう可愛いです！秀吉君！

「うん、これも秀吉君のおかげだよ。あの時、秀吉君が励まして、私にまた希望をくれたから。だから、秀吉君が帰ったあとでもリハビリを続けることが出来て、今はこの通りに動けるようになったからね」とその場で一回転し、元気な姿を見せた。

「良かったのじゃ、僕もとっても嬉しいぞ」（ニコッ）

「！！！！？ その笑顔は反則だよ……」（＼＼）
急いで顔を背け真っ赤になった顔を隠した

「？どうかしたのかの？」

「う、ううん、な、なんでもないから……」

「そうか？ならいいんじゃないが。あ、ところでどうして夢希はこの学園に居るのじゃ？」

「うん、それは、ハッ！（落ち着け、私。この状況をよく見ろ、綺

麗な夕日に、だれもない屋上、2人つきり…こ、これは、告白するに千載一遇のチャンス！秀吉君に好きだって告白しよう！）そ、それは、ね（〃〃）」

「それは？」

「そ、それはね！」

「それは？；」

「そ、それは、……ね、姉さんがこの学園に進学するて聞いて、わ私もここにしようと思って；は、ははは；（私のバカ；；；せつかくの告白のチャンスが（T-T））」

「そうじゃったのか、なるほどのう」

「と、ところで話は変わるんだけど、秀吉君、やっぱりここでも演劇部に入ってるの？」

「うむ！儂にとって演劇部はなくてはならない存在じゃからな」と嬉しそうに答えた。

「なら、昔やってた発声練習とかは止めちゃった？」

「まあ、確かに回数は昔に比べたら減ったが、放課後、部活が終わった後にたまにこうやって屋上でやったり、休日は部屋の中や天気良ければ公園や川辺などで練習したりするぞ」

「な、ならさ、また昔みたいになさ、その練習手伝ってもいい？」またあの時みたいに秀吉君の手伝いをしたいと思い、そう言う

「良いのか？夢希は何か部活とか入らぬのか？」

「うーん、これだ！ていうのがなかったし、それにあの時は秀吉君のほうより私のリハビリのほうに時間かけて貰っちゃったでしょ？今は自由に動けるようになったし、今度は私が手伝いさせてくれなかな？」それを聞いた秀吉君はしばらく悩んだ後に

「…なら、お願いしても良いかの？出来るときだけでいいからの」

「うん！喜んで！また宜しくね！」と手を出し握手を求めた。

「こちらこそ、また宜しくなのじゃ！また夢希と会えて嬉しいのじゃ！」そう言って握手してくれた。

だ、だから、その笑顔は反則、ごによごによ…

顔を再び真っ赤になって耐えられなくなってきたので

「え、えーと、そろそろ帰るね…、また明日ね、秀吉君！」そう言って全速力で階段を下りた。

一階まで下りるとようやく落ち着き

「や、やった〜」と小さくガッツポーズしていた。

告白は失敗しちゃったけどまた秀吉君と一緒にいられる口実出来たし、少しは前進だよね！と喜んでいると

ガシツと肩を掴まれ振り返ると

「夢希、見つけた」とどこその世紀末霸王のオーラを纏った優子が笑顔でこちらを見ていた…

[;°□°)?!?!Z

優子にきつくお説教を受けた後家に帰った……うっ……ひどいよ

家に帰ると姉さんに手伝ってもらつて荷物を片付けている途中で秀吉君との事を思い出してニヤニヤしていると姉さんから

「……夢希、ちよつと、怖い。」と言って少し引かれてしまった。失礼な！

今日一日ドタバタと忙しいかったけど、秀吉君と再会できていい一日になったなと思います。ベッドに入りました。

おやすみなさい

再会 その2（後書き）

ご意見感想ありましたらお願いしますm（
—（
m

第八話（前書き）

なんとか出来上がりました（^| ^;）相変わらずのグダグダな作
りですが見てやって下さい m（| |） m

第八話

秀吉君との再会を果たして数日が経った。その数日は昔と同じように秀吉君の練習の手伝いを再開したり、姉さん、愛子、優子の三人に学校を案内してもらったりとどれも内容の濃いものだった。そんな日々を過ぎたある日のこと。

「え？私を秀吉君の友達に紹介したい？」

朝、学園に行く途中に秀吉君会うとそうお願いさせた。

「うむ、夢希はここに編入してまだ日が浅いから知り合いとか少ないじゃろ思ってたな。…迷惑じゃったかの？（上目使い）」

だ、だからそれは；（以下省略）

「ううん、迷惑じゃないよ、私のことを考えてくれたんだから嬉しいよ！私からも是非会ってみたい」

「そうか！なら、今日の昼休みに屋上で、どうかの？」

「うん、わかったよ！楽しみにしてるね」

「では、またの」

「またね」

学園につくと、それぞれの教室に分かれた

秀吉Side

「で、その編入してきた秀吉の友人を俺達に紹介したいと？」背が180センチくらいで意志の強そうな目をした赤い色の短い髪をした男、坂本雄二、うちのクラスの代表で男らしいところは密かに憧れておる。

「うむ、編入したてで知り合いがあまりおらんから友人なってあげて欲しいのじゃ」

「でも、大丈夫なの？その子Aクラスなんでしょ？上級クラスの連中って下級クラスを見下す奴とか少くないでしょ？」ポニーテールでボーイッシュな顔立ちで胸は『男』の儂と同じ、ギロ！？……ふくやかな胸をした女子、島田美波。ドイツからの帰国子女で日本語があまり読めなかったらしくそのせいでFクラスになってしまった気の毒な女の子じゃ。

「大丈夫じゃ、夢希はそういうことは言わん娘じゃ」

「相手は女子！、…まかせろ、何があっても必ず行く！」
会う相手が女子と分かると途端にやる気を出し何故かカメラをチエックし出したのが土屋康太、異名の寡黙なる性識者^{ムツリーニ}で有名な男子じゃ。どうしてか儂の写真を撮り売ろうとしているのじゃ、儂の写真なぞ買っやつなどおるわけ

「秀吉が言うのだからきつとその子も秀吉と同じく、『美少女』だよね」

…居たのじゃ；

この者は吉井明久、この学園の観察処分者、つまり学園一のバカじやな。

「秀吉？なんか今、凄くひどいこと言われたような気がするんだけど？」

「気のせいじゃあ、気にするな」　ところで明久よ、何度も言うようじゃが僕は『男』じゃぞ？；」

「何を言ってるんだい秀吉？どこからどう見ても美少女じゃないか」

「…で、会う女の子が木下君と同じく可愛い子ならどうするんですか？ナンパでもするんですか？吉井君？」

ピンク色の背中まで届く髪をし、誰もが守ってあげたくなくなるような可憐な容姿をした女子、姫路瑞希…だったのじゃが今は黒いオーラを発しながら明久を問い詰めていた；

「それは、ウチも聞きたいわね、吉井」

どうやら島田まで加わったらしい；島田まで黒いオーラを発して；

「だ、だから、それは誤解だよ…、ア、アーーーーー」。

…明久よ、強くいきるのじゃぞ；

「……………」

ふと振り返るとなにやら雄二が考え事をしていた。

「どうしたのじゃ雄二？何かあったのかの？」

「ん？ああ、いや、なんでもねえ。ちよつとな。（まさかとは思うがな…）」

「それでは、皆、今日昼休み、屋上に来れそうかの？」

「ああ、いいぜ」

「ええ、いいわよ」「…当然！」

「はい、構いませんよ」

「オ、オッケー、…ガクッ」

皆来てくれるようじゃ、昼休みが楽しみじゃ

第八話（後書き）

感想をお待ちしてます（T—T） 短い文でも励みになりますので；
m（—）（—）m

第九話 初対面ともう一つの再会（前書き）

ちよつとした不具合で、どうやら話が上がってなかったらしいので
急いで再投稿しました； 見に来て下さった方どうもすみませんで
したm（ー）（ー）m 相変わらずの作りですが見てやって下さい

第九話 初対面ともう一つの再会

夢希 Side

今日の昼休みに秀吉君のお友達と会うことになった。

しかし、私一人だと緊張してしまうので誰か一緒に来て貰おうと考えていた。

優子はFクラスを嫌っている節があるので

もしFクラスのメンバーとギクシャクするようなことが起きれば元も子もないので

…とりあえず却下；

本当なら姉さんも一緒に連れて行きたいけど…

もし、今日会うメンバーの中に雄兄が居たら、恐らく姉さんを見たら避けるか、逃げるかもしれない。

雄兄があ勘違いをやめてくれたら、姉さんの恋も早く実というのに…

となると、愛子なら大丈夫かな。

愛子は上級クラスとか下級クラスとかそういうことは考えないだろうし…

「という訳で、今日の昼休み空いてる？愛子：」

「いきなりだね、夢希：。まあ、今日は予定入ってないし構わないよ」

「ありがとう、愛子。一人だと緊張しちゃうからさ」

「あつはつは、別にいいよ、気にしないで」ボクもFクラスを見てみたい理由があるから。」

「理由？」

「気になってたんだよね、だってさDクラス相手とはいえ格下のFクラスが勝者だよ？気にならない訳ないじゃない」

「そうなんだ。じゃあ、お昼食べた後に行くとしてせっかく天気もいいんだし、屋上で食べようよ。」

「ん、OK」

そして、昼休みになり、私は愛子と一緒に屋上に向かった。

屋上に向かうとそこには、秀吉君を含む男子三人がいた。

「あ、あれ？どうして霧島さんが？確か秀吉の友達が来るんじゃないかったの？秀吉」

秀吉君を除いた二人の男子のうち、女装が似合いそうな男の子が慌ててそんなこと言っていた。

「霧島翔子は、私の姉さんだよ。私は妹の霧島夢希です。よろしくね」

「そうだったんだ、僕は、吉井明久、よろしくね、えーと妹さんて呼んでもいい？名前はちよつとまずいから」

「なんでまずいの？」

「呼んじやうと、ちよつと、というかかなり危ない集団になにされるか分からないから……（小声）」

「あ、ああ、ただのあだ名だよあだ名；（ムツツリスケべって意味は教えたほうがいいのかな？；）」

「へ、君がムツツリー二君なんだ、なかなか面白い男の子だね、」

「…誰？」

「おっと、自己紹介がまだだったね」

「ボクは、夢希と同じくAクラスの工藤愛子、以後よろしく、」今日、夢希の付き添いで来たんだ」

愛子はスカートの裾を摘むと

「じ・つ・は、この下、…何も履いてなかったりして、」

「ブッハアアア！？（鼻血の滝が）」

「っ、土屋君！？だ、大丈夫！？血が大量に；」

私が慌ててそう言っている隣で、吉井君が慌てることなく

「ああ、大丈夫だよ、妹さん。いつものことだから。秀吉、ムッツリーニの鞆から輸血パック取って」

「うむ、これじゃな」

二人とも慣れた感じで輸血パックを取り出し、輸血していく。

「な、なんだか手慣れてるね」

「まあ、毎回やってればね」

「慣れてくるというものじゃ」

『はあ……』

二人とも、何かと苦勞してたんだね；

「もう、愛子も変な冗談言っちゃだめだよ？」

「あはは、ごめんね」 実際は、スパッツ履いてたんだよね」と

スカートを捲りスパッツを見せる

「くっ！謀ったな！」

土屋君、鼻血を出しながら怒られても全然怖くないんだけど；

「もう、何やってるのよ、土屋、それに吉井達も」

「あ、あのー、土屋君、大丈夫ですか」

振り返るとそこには、ポニーテールにボーイッシュな顔立ちの女の子に、Dクラス戦で勝利を決めた、姫路さんがそこにいた。

「はろはろー、ウチは島田美波よ。よろしくね」

『（あなたが）（キミが）島田美波さん？』

私と愛子は同時にそう言っていた。

「え？なにになに？ウチのこと、知ってるの？」

「う、うん、話で聞いたことがあったから」

「話って、どんな話なの？」と期待している目で聞いてきた。

「え、え〜とね、Fクラスに帰国子女の可愛い女の子がいるって話を聞いてね〜、ねえ？愛子」

「う、うん；そうそう、それで島田さんのことを知ったんだよ。あはは」

「可愛いだなんて、ちょっと恥ずかしいな（〃〃）」

『（い、言えない、男子の会話の中で、彼女にしたいくないランキングでよく聞く名前だから、なんて言えない；）』

と、私と愛子は心の葛藤と戦っていた；

「美波ちゃん、可愛いですもんね。あ、自己紹介がまだでしたね、私は」

「姫路瑞希さん、だよな？見てたよ、Dクラス戦。サツと現れたと思うたら、あつという間Dクラスの代表倒しちゃうしね」

「そうだね〜、いきなりFクラスとして宣戦されるんだから、Dク

ラス代表も意表つかれまくりで、啞然としてたしね」

「あははゝ、振り分け試験の時、私」

「ああ、その話は優子から聞いたよ。で、どう？Fクラス楽しくない？」と愛子が聞くと

「そんなことないです！今、私すごく楽しいです！」と言っている瑞希の視線の先を読み取った愛子が

「そうだよねゝ、……好きな人も一緒だしねゝ（小声）」

「え、ええ！？（〃〃）え、えゝと、と、ところでお二人は？」

瑞希が照れ隠しにそう言つと

「ああ、自己紹介がまだだったね。ボクはAクラスの工藤愛子。それで、隣にいるうちの代表にそっくりなこの子は、代表の妹の、霧島夢希ゝ よろしくゝ」

「霧島夢希です、よろしくね、姫路さん、島田さん」

「はい、こちらこそよろしくお願いしますね、工藤さん、霧島さん」

「『霧島さん』、それだと私か姉さんか、わからなくなるから、夢希でいいよ」

「ボクも、工藤さん、じゃなくて、愛子でいいよ」

「それじゃあ、私のことも、瑞希で呼んで下さいね、愛子ちゃん、夢希ちゃん」

「ウチのことも美波で呼んでね」その代わり、二人のことも、愛子、夢希、て呼ぶからね」

などと女の子どうして盛り上がっていた時

「まさかとは思っていたが、……こっちに帰って来てたんだな、夢希」

振り返るとそこには「よっ」と柔らかない表情をした、幼なじみの雄兄がいました。

「はい、お久しぶりです、雄兄」

こうして、Fクラスの面々との初対面ともう一つの再会があったのでした。

第九話 初対面ともう一つの再会（後書き）

ご意見、ご感想がありましたら、どしどし送って下さい。あともう一回だけ再会の話続きますのでf ^ | ^ ;

初対面ともう一つの再会 その2（前書き）

なんとか出来上がりました（^ー^；）

見てやって頂ければ幸いです（。□。；）

初対面ともう一つの再会 その2

「もう身体は大丈夫なのか？」雄兄が似合わないくらい心配そうな顔で言ってきました。

「はい、もうこの通り、大丈夫ですからそんな心配そうな顔しないで下さいよ、全然似合いませんよ？」

「う、うるせーな、似合わなくて悪かったな！」

こんな風に昔と同じように雄兄と話していると吉井君が

「あのさ、雄二、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ？」

「?どうした、明久？」

「なんか妹さんと親しい感じで話してるけど、どついう関係なの？」

「ああ、こいつと姉の翔子は、俺の幼なじみだ」

「ふーん、そっかあ。」

何だろう？吉井くんとそのうしろの土屋くんの雰囲気が…

と、私が思ったその時

「殺せ！……！！」

そう言うと、いきなり、吉井君と土屋君がカッターナイフを取り出し、雄兄に襲いかかった

「うお！？、いきなり何しやがる！？明久、ムツツリーニ！！」

「うるさい！！、妹さんみたいな可愛い子だけじゃなく、そのお姉さんとも幼なじみとは！！」

「…許すまじ！！」

どうやらあらぬ誤解で雄兄がピンチのようです。私がなんとかしないと

「ちょ、ちょっと、待って下さい！雄兄と私は本当にただの幼なじみだけです！二人が考えているような関係じゃないんです」

「「…本当に？」」

「はい」

「夢希、…うんうん」人は長い歳月によって成長するというのは本当だな。俺は嬉し」

「あ、姉さんと雄兄は、お互い裸を見せ合った仲ですけどね」

「おいしいいいい！！」

「あ、それは幼い、」

幼い頃の話と言いかけた時

バン！！と屋上の入り口が開いたと思ったら、いきなり周りが暗闇に包まれ、気がつくと思い覆面をして鎌を持った集団に囲まれていた。

「え、ええ！？な、なんなの？この人達！？というか、ここ、屋上なのにどうやって暗くしたの！？」などとパニクる私をよそに

「これより、異端審問会を開く、坂本雄二、汝は、我らとの血の盟

約を破り、幼なじみの女子の裸を見るという大罪を犯した。と言うわけで…即刻死刑!!」

「お前らと血の盟約なんぞ、結んでねえし、みたのは幼いガキの時だ! 夢希! 状況を更に悪化させるんじゃないやねえええ!!」

勢い良く走り出すと階段を駆け降りて行き、黒い覆面集団が凄いスピードで追いかけて行った。

「……失敗しちゃいましたね、えへ」

「えへ、じゃないわよ、坂本大丈夫かしら、うん? そう言えば、土屋と吉井は? 随分静かだけど? ……こういうことね」

「ん?、…なるほど」

美波の視線の先を辿るとそこには鼻血を出して倒れてる二人が居た

「ところで、瑞希、美波、どこに行ってたの?」

「あ、はい、私と美波ちゃんと坂本君とで学食にパンと飲み物を買に行ってたんです」

「だから、場所取りと買い出しに分かれてたのよ」

「そっか、じゃあ、そろそろ、お昼食べようか、雄兄もそろそろ帰ってくる頃だと思うし」と言っているその後ろから

「ぜえ、ぜえ、夢希、お前という奴は！」

「あ、あはは、まあまあ、雄兄、ひとまず落ち着いて、お昼でも食べましょうよ、食べないと時間なくなっちゃいますし！」

そう言っていると、まだ不満げな顔をしつつも、なんとか座ってくれました。

「ほれ、明久もムツツリー二も起きるのじゃ、はやく昼食食べねば、時間がなくなるぞい」

そう言つて、秀吉君がなんとか二人を起こし、お昼を取ることにになりました。

「「いただきます」」

「あれ？夢希と愛子はお弁当なの？」

「うん、私はいつも、自分で作ってくるよ」

「あはは、私は、お母さんが作ってくれたのだけどね・部活とか忙しいから」

「ところで、吉井君は何も買わなかったの？水筒しかないみたいだけれど？」

「何を言っているんだい？妹さん。これが僕の昼飯さ」

……水（塩入り）

何だろう、猛烈に吉井君の生命の危機を感じるのは私だけだろうか

……

「あ、あのー、吉井君？良かったら、どうぞ」

私はそう言つと少しお弁当を吉井君に分けてあげた。

「え！？いいの？ありがとっ、妹さん！」と嬉しそうに受け取ると

「「「なっ!!」「」と美波と瑞希、そして何故か秀吉君が大きな声を上げていた

「吉井君!!私のパンもあげます!」

「ウチもあげるわよ!吉井!」

「ど、どうしたの?姫路さんに島田さんも、って、痛い、痛いよ!; どうして背中を叩くんだよ?秀吉」;

「姫路や島田からパンが貰えるのじゃから、べ、別に夢希の弁当、食べなくても、良いではないか; (〃〃) (小声)」

「ははゝん、そう言うことなんだ」

愛子が何かに気がついたみたいで、ニヤニヤとした顔で秀吉君に近付くとなにやら言ってるみたいだ

「弟君は、夢希のお弁当をもらった、吉井君を嫉妬したのかな? (小声)」

「な!!そ、そんなことないのじゃ!!」

「まあ、そういうことにしておくね」(夢希、全然大丈夫、脈大ありだよ)「」

なにやら、愛子が私に向けて（b^_~^）しているみたいだったけど、私は意味がわからず首を傾げるのだった

初対面ともう一つの再会 その2（後書き）

こっぴつ秀吉もどつでしょうか（笑）感想お待ちします

主人公設定その2（前書き）

主人公の得意科目や特技などを詳しく書いておきました。これを見てこういう奴なんだと参考にして下さい

主人公設定その2

名前 霧島夢希

(きりしま ゆき)

得意科目 国語 日本史 現代社会

苦手科目 数学 保健

特技 料理……かなりの腕前で、どんな料理も再現できる。そう、それが殺人級な料理でも……

カポエラ…足のリハビリが順調にいき、調子が出てきた頃にテレビでカポエラを見て、リハビリと同時に護身術にならないかと思い、その頃から習い始め、姉と同じく天才肌なためかめきめきと上達し、今では雄二の意識を一瞬で刈り取るまでになっている

ポイントカードのポイント集め……買い物をした時必ず集めるほど好き。ポイントカードは人類の英知の結晶らしい(本人談)

姉の翔子に比べて、電気器具の扱いは上手いので、よく姉の翔子にやらされてる

主人公設定その2（後書き）

次はいよいよ試召戦争です。うーん：戦闘シーン上手く書ければいいんですが； 良かったら見てやって下さいm（＿）m

第十話　これが私の召喚獣（相棒）（前書き）

試召戦争に入りたかったのですがその前にひとつ話を入れて起きたかったので；

相変わらずな感じですが見てやって下さいm（　　）m

第十話　これが私の召喚獣（相棒）

雄兄達とのお昼の一件から数日が経ったある日の放課後

「そういえば、夢希、夢希はまだ自分の召喚獣出したことなかったわよね？」

優子にそう言われ、考えてみると

「ああ！、言われてみれば、私、まだ召喚獣出してないよ！、」

「いや、編入してもう何日か経ってるんだら、気付こうよ！」と愛子にまで突っ込まれてしまった。

「こ、こういうので、イメージトレーニングとか必要なのかな？」

「別に、そんなに大層に構えなくても大丈夫よ、慣れよ、慣れ。手っ取り早く、模擬戦でもしましょうか」

ええ！？いきなり模擬戦から始めるの！？と狼狽しているうちに優子が西村先生を見つけると

「西村先生、模擬戦を行いたいのので、承認をお願いできませんか？」

「模擬戦か？いきなりまた、どうしてだ？」

「はい、夢希さんがまだ自分の召喚獣を出したことがないので、模擬戦を行って、その中で、夢希さんに色々教えてあげて、私、夢希さんの力になってあげたいんです」

「困っているクラスメートを親身になって助ける…、まさに生徒の見本！流石だな、木下」

先生の前だと瞬時に優等生の仮面を被り、演じる優子を見て、秀吉君と互角な演技派ではないかと考えていると

優子がこちらを見つめてきて、『余計なこと言うんじゃないわよ、言ったら…分かってるわよね？』

と笑顔だけれど明らかに笑ってない目で警告されてる

これ以上の詮索は危険なので止めにする；

「わかった、では、どの科目での模擬戦をするんだ？」

「夢希、得意科目は何？」

「え〜と、国語と日本史、あと現代社会かな」

「では、西村先生、国語での模擬戦の承認をお願いします」

「わかった、…では、国語勝負の模擬戦を承認する！！」

「え〜と、どうやって呼び出したらいいのかな？」

「こうやって、やればいいのよ、…試獣^{サモン}召喚！！」

優子の喚び声に応えて、優子の足元から魔法陣が現れ、そして、西洋風の鎧を装備し、ランスを持った優子そっくりの顔をした召喚獣が現れた。

「はい、次は夢希、今みたいにやれば出来るはずだから、呼び出してみて」

「うん、わかった。…、試獣^{サモン}召喚！！」

優子の時と同じ様に私の足元に魔法陣が現れ、そして、召喚獣が現れた。

黒い法衣服に黒いブーツを履いて、シルバーのトンファーを装備し

「へえ、それが夢希の召喚獣ね、武器はトンファーか」

右腕に黒い腕輪を装備していた。

Aクラス

木下優子347点

VS

Aクラス

霧島夢希511点

「な!!400点超え!!てことは、夢希、あんた、『腕輪』装備してるの?」

「う、うん、一応。まだ使ったことないからわからないけど。」

「だったらちようどいいじゃない?その『腕輪』の効果、一体どんなモノなのか見せて貰うわ!行くわよ!夢希!」

.....

.....

.....
.....
「夢希！……もう一回勝負なさい！……」

「まあまあ、少しは落ち着きなよ、優子。夢希がとどめを刺さずに終了したから良かったものの、刺されたら鬼の補修だよ？」

「うっ……」

「あはは……」

その後、私は『腕輪』の効果で優子を追い詰めた。とどめを刺してしまうと西村先生の鬼の補修を受けることになるので止めておいた；

「まあ、いいじゃない、夢希が戦力になるのはわかったし、『腕輪』の効果も使い方次第で私たちに有利になるしさ」

愛子がなんとか優子を宥めてくれて、ひとまず落ち着きを取り戻した

「……わかったわよ、確かに夢希が戦力になるのもわかったし、なにより『腕輪』の効果があれだけのモノなら対戦した価値があると言っものよ」

優子がこれほど誉めてくれるとは…なんか照れくさいな”

「あ、でも！いつか必ず再挑戦するからね！勝ち逃げはさせないからね！」

……どうやらそこは全然諦めてはいないらしい；

とにかく、初めての召喚獣の呼び出し、対戦、そして『腕輪』の使用…、それらが上手くいって、改めて、文月学園の生徒として学校生活を送ってだなと心も軽やかに家に帰った

しかし、翌日、そんな私の意思も関係なく、試召戦争は突然やってきた……

「木下優子……！……出てきなさい……！」

続
く

第十話 これが私の召喚獣（相棒）（後書き）

次こそ必ず試召戦争に入りますので（。□。；）『指輪』の効果などは次回明らかに♪ ご意見ご感想ありましたら是非お願いします
m（――）m

第十一話 試召戦争Cクラス編 その1（前書き）

アニメ二期が始まりましたね。相変わらずの内容で安心しました（
' '）

なんとか話が出来上がりました。また長々と引き伸ばしていますが
良かったら見てやって下さいm（' '）m

第十一話 試召戦争Cクラス編 その1

「木下優子！！出て来なさい！！」

そう大きな声で、ひとりの女子がうちのクラスに入ってきた

「貴方は確か、Cクラス代表の小山さん？」

優子がそう言つと物凄い剣幕で

「さっきはよくも言いたいことを言ってくれたわね！木下優子！！」

「ちょ、ちよつと待って；、一体なんの事？」

「惚ける気！！私達を豚小屋呼ばわりしたくせに！！」

「豚小屋って、……優子……」

「ちょ、ちよつと；、；、そんな目で見ないでよ！！違つてば！」

「大丈夫だよ、優子。優子がどんな趣味を持っていようが、私達は

友達だよ（ニコッ）」

「そうだよ、優子。ボク達はいつまでも友達だよ（ニコッ）」

「後退りしながら言っても全然説得力の欠片もないわよ！！違うって言うてるでしょうが！！」

「私を無視するなー！！」

あ、小山さんがキレた

「とにかく！私達Cクラスは、Aクラスに対して、宣戦布告するわ！覚悟しなさい！木下優子！！私達を豚小屋呼ばわりしたこと後悔させてやるわ！」

「だ〜から〜、私そんな事言っただけでいいってば〜」

とりあえず、小山さんを落ち着かせようと、声をかけようとすると、ギロツとこちらを見て

「学年首席だからっていい気になってたら痛い目見るわよ！」

「へ？私！？」

「どうやら、私を姉さんだと勘違いしたらしい、うう・なんか怖い；

「では、準備が整い次第、開戦よ！覚悟なさい！！」

そう言つと、小山さんは出て行つた。

「……どうかしたの？夢希？」

教室を出ていた姉さんが帰ってきた。どうやら今起こっていることに把握出来てないらしい

「姉さん、…ちょっと厄介なことが起きちゃいまして…」

「どうやら、優子がCクラスを豚小屋呼ばわりしちゃったみたいでね」

「だから、私は言っていないって言つてるでしょうが！！」

そんなやり取りを見て、少し考える仕草を見ると姉さんが

「……じゃあ、誰がそんなこと言ったの？」

姉さんがそう聞くと愛子が

「そりゃあ、優子じゃないとしたら、優子に似てる人、あ……」
と愛子は気がついたらしいが時すでに遅く

ゴオオオオオオオ！！！！

ガタガタガタガタ（。□。；）

……、今、この教室に、殺気と怒気と闘気が入り乱れて、教室にいたみんなは蛇に睨まれた蛙のように動けなかった……

「ククク、そう……、あのバカの仕業だった訳ね、ああ……秀吉、姉さん今すぐ秀吉に会いたいな、……会いに行つて殺りたいわ……」

……これ以上優子をほっておくと、本気で秀吉君の命が危ないので当面の話を進めることにした；

「あ、あのさあ、優子？Cクラスはどうするのかな？……」

「もちろん、殺るわよ！あそこまで言われたんだから、徹底的に思い知らせてやるわよ！AクラスとCクラスの格の違いをね！！！」

あの、優子？一文字漢字間違ってるよ？； 殺しちゃだめだからね？

「それで、Cクラスとはどんな戦略で戦うの？」

愛子が優子にそう尋ねると、優子は自信満々に

「本来、Cクラス位なら力押しでも勝てる相手だけど、今回は勝ち方に拘ってみるわ」

「拘る？勝ち方？」

「そう、戦死者誰一人も出すことなく、完膚なきに叩きのめす！誰の目にも明らかなぐらいにね！」

「策とかあるの？向こうはこちらの点数差知ってるから、一対多の戦いに持ち込むと思うから、そう簡単に動かないと思うけど？」

私がそう聞くと揺るぎない自信にあふれた顔で

「大丈夫よ、策ならあるわ！ 私と夢希が策よ！」

「優子と私？」

「みんな！集まってくれる？策の説明をするわね、まず……」

そして、時が満ち、試召戦争の開戦である。

CクラスSide

「行くぞ！俺達を豚小屋呼ばわりしたAクラスに目にもの見せてやれ！」

「おおおおお……！！！」

「お、おい！あれを見る！」

そこにはAクラスにいるはずの代表、霧島翔子と木下優子がそこにいた

「Aクラスの代表が何故、前線に？しかも護衛が一人しかいないぞ

？」

こちらが困惑していると

「あなた達くらい、私達二人で十分よ」

木下優子がまたしても、こちらに対して暴言を言ってきた

「おのれ、またしても！」

「…、それじゃあ、頼んだわよ、代表！」

そう言うといきなり木下が走って後退して行った

「逃がすか！追え！」

そう言っただけの時

「……待つて、あなた達の相手はこっち。…この場にいるCクラス
全員に国語勝負を申し込みます、…試獣^{サモン}召喚！」

魔法陣が現れ、出て来たのは、

黒い法衣服を着て、黒いブーツを履き、シルバーのトンファーに黒い腕輪を装備した召喚獣だった

第十一話 試召戦争Cクラス編 その1（後書き）

戦闘前で終了； 前回のあとがきで腕輪の効果見せると書いて見せてない…、すみませんでした（。□。；）！次回、次回こそ書きますのでお許しを…；

どうか見捨てないで見てやって下さいm（――）m

第十一話 試召戦争Cクラス編 その2（前書き）

と、とりあえずなんとか形になりました（。□。；）

見てやって下さいm（――）m

第十一話 試召戦争Cクラス編 その2

「くっ、木下優子を逃がしたわ!」

「別に気にするな、代表さえ倒してしまえば俺達の勝ちだ!」

そう言つとCクラスの面々は周りを取り囲み、召喚した

国語

Aクラス 霧島翔子(?)

511点

VS

Cクラス 総勢20人

総合3900点

「なっ!511点だと!半端じゃないぞ!あの点数!」

「落ち着け!点数が高かるうが所詮一人!この人数で掛ければ勝てる!行くぞ!」

そうくクラスの誰かが言うと、一斉に飛びかった

「…それじゃそろそろ、始めましょうか！『幻影』！！」

そう言うのと右腕の腕輪が光を放った…

優子Side

「夢希一人だけど大丈夫かな？優子」

愛子が心配そうに夢希がいる前線を見つめながら、そう呟いた

「大丈夫よ、むしろ一人だからこそあの『腕輪』を使うことが出来るんだから。もし、あの中に私達が入れば私達までやられかねないもの」

「そうだったね、あれは人数が多いと悲惨なことになるしね」

前回、私と夢希の対戦を見ていたためか苦笑いで愛子がそう答えた

「さてと、私達も位置につくわよ！目指すは完全勝利！！」

『おおー！！！！』

夢希Side

姉さんに化けて、敵の視線をこちらに向けさせ、優子を前線から離すことに成功し、今こうして敵前線を『腕輪』の効果範囲内に誘い込むことに成功していた

「な、なんだ！前がよく見えない、霧か？」

「ぐっ！？な、何するのよ！？こっちは味方よ！」

「霧島翔子はどこに！！」

『腕輪』の効果範囲内に入ってきたクラスは、攪乱、同士討ち、などに陥って混乱していた

『幻影』：霧を発生させ、その中で自分の召喚獣に似た影をいくつも作り出して霧の中に入り込んだ者を攪乱させる

これが私の『腕輪』の能力

さて、これからどうするかと思考していた所に、こちら見つけたの
だろう。クラスの一人が迫ってきた

「見つけたぞ！霧島翔子！かく、こ…？」

あちらは、どうやらこちらを見て驚いているみたいだ

今の私は髪を元のポニーテールに戻し、闘志を燃やす目つき、やる
気に満ちた口調で

「ええ、それじゃ、…いくわよ！！」

そう言うと召喚獣が足に力を入れ、そして一気に飛び出して相手の
召喚獣に迫った

「お、お前、本当に、あの霧島翔子なのか？ファンのやつらから聞
いていたのとは違うし、召喚獣も！？」

「私は、霧島翔子の妹の、霧島夢希！宜しく、ね！！」

敵の召喚獣の攻撃を避け、そして

「ぶはあああ!?!」

綺麗に回し蹴りが決まり、相手の召喚獣が消滅した。そして

「戦死者は補習だー!!!!!!」

「い、いやだあああ!!!!!!」西村先生に連行されていった

CクラスSide

「ぎゃあああ!?!」

「し、しまつ、ぐはあああ!?!」

次々と味方がやられる声が聞こえてきている

「くつ、たかが一人と思って油断した!このままだと無駄に戦死者を出すだけだ。…一時後退だ!!!霧を抜けて体勢を立て直すぞ!」

残存している部隊を引き連れ後退し霧を抜けるとそこには

化学担当の布施先生を引き連れた、メガネを掛けたAクラス的女子と数名のAクラスの生徒が立ちふさがった

「布施先生！私、佐藤美穂はじめ、ここにいるAクラス、この場に
いるCクラス全員に物理勝負を申し込みます！」

「な、なんだと……！！！！！」

Cクラス本陣

「何ですって！！前線部隊が前後挟まれて身動きが取れない！？」

「は、はい；腕輪によって発生したと思われる霧の中で激しく攪乱
されたみたいで、立て直すべく後退した所を急襲された模様で；」

「なら、ここは私と数名の近衛部隊だけ残して後は救助に向かいな
さい！早く！」

「り、了解……!!」

どうしてこうなった？ええい!!これも全て、あの木下優子のせいに違いない!きつとそうだ!

「おのれ!木下優子!!」

あまりにも感情的になりすぎて、小山友香は冷静さを無くしていた

「あら、全て私のせいにされても困るわよ?小山さん」

「木下優子!?!どうしてここに!?!」

「どうして?そろそろ、この試召戦争を終わらせようとおもってね。

あ、そうそう、さっきの救援に向かった部隊を呼び戻そうとしても無駄よ。

うちの伏兵部隊が足止めしてるわ、クラスで一番保健体育得意な子が率いてる部隊で担当の教師付きだけど……もしかしたら全滅してるかもね」

「くっ、木下優子！」

「それじゃあ、終わりにさせて貰うわ！木内先生！

Aクラス、木下優子がこの場にいるCクラス全員に数学勝負を申し込めます！承認をお願いします！」

気がつくと、そこには数学担当の木内先生が立っていた

「了承します！」

「代表をやらせるな！」

『試獣召喚！！（サモン）』

数学

Aクラス 木下優子

376点

V S

Cクラス

近衛部隊	A	142点
近衛部隊	B	128点
近衛部隊	C	137点

「ちょゝ、俺達のこの扱い酷くない！？；」

「作者がいい名前思い付かないのでこうなりました。すいませーん（
ー、ー）」

「雑魚に名前なんて必要ないわよ！」

「ひどっ！？（。□。；）」

武器のランスを構えると突撃し、近衛部隊を弾き飛ばし、一気に小山に迫った

「くっ！試獣召喚！（サモン）」

Cクラス 小山友香

181点

和服にプリーツスカートを合わせた服装に三叉戟を持った召喚獣が現れた

「くっ！」

「くうう！！…！」

激しく激突するランスと三叉戟

しかし、それも長くは続かず、ついに…

「くっ！？、しまっ！！」

「貰ったあああ…！」

優子の召喚獣が三叉戟を弾き飛ばすと、そのままランスを小山の召喚獣に突き立て召喚獣は消滅した…

これにより試召戦争は終結した

第十一話 試召戦争Cクラス編 その2（後書き）

初の戦闘シーンの構想や数々のやり直しやボツなど難産でした。

□。；） ご意見や感想ありました是非お願いしますm（――（

m それらが作者の支えになりますので；

第十二話 戦後対談

AクラスとCクラスの試召戦争はAクラスの勝利で終結した

夢希達は戦後処理のため、Cクラスの教室を訪れていた

「さて、さっそくだけで戦後対談に移りたいんだけど、その前に誤解を解いておきたいの。小山さん」

黙ってはいたが、未だに睨むように優子を見ている小山さんがそこにいた

「何度も言うようだけど、私はあの時、Cクラスに行っていないわ。」

「じゃあ、貴方じゃないなら一体誰だって言うの？」

「私にはね、容姿が私と瓜二つの双子の弟がいるの。Fクラスにいるんだけどね。秀吉で言っただけね演劇部に入っているんだけど」

優子がそう言うところから

「そう言えば、木下秀吉で演劇部のホープじゃないか？」

「そう、アレは勉強を疎かにするほど演劇にハマってるの。今では他人の声を完璧に真似まで出来るぐらいにね。そして、その声真似と変装で私に化けて貴方達を挑発してこちらに戦争を仕掛けるようにした……てのがFクラスの計画なんでしょうね」

「それじゃあ何？私達は、貴方の弟、木下秀吉、つまりFクラスにいいように利用されてたって訳？」

「まあ、そうなるわね。まだ信用出来ないなら一度演劇部に行ってみに行けばいいわ。
勉強そっちのけでやってるからその分大した物よあれば」

「くっ！Fクラスめ！」

小山さんは親指の爪を噛みながら悔しさを露わにした

「それで、私から貴方達に言わなければならないことがあるの」

そう言うと、さっきまでとは違い優子の目つきが真剣なものになっていた

「言わなければならないこと?」

「……………」ごめんなさい

優子は深々と頭を下げていた

「ど、どうして貴方が頭を下げる必要があるのよ……?」

いきなりのことに小山さんは慌ててそう訪ねると

「今回、あの愚弟のことは、姉である私が止められなかったことにも責任の一片はあるし、作戦とは言え貴方達を愚弄するような事を言ってしまったのも事実……だから改めて、本当にごめんなさい」

そう言うとき優子はもう一度深々と頭を下げた

「も、もういいから……!? わかったから!? 頭を上げて……せ、戦後対談するんですよ!」

と顔を真っ赤にさせながら頭を上げさせた小山さん……

小山さん、実はいい子かも……、そんな小山さんにキュンとするこ

クラスの男子が数名いたりもするし；；

「そ、それで私達はどうなるの？やはり設備のランクを下げる？」

覚悟は出来ているといった表情で小山さんがそう尋ねると

「ああ、その件なんだけど、夢希？」

「うん、その事なんだけどね？小山さん。今回は和平交渉で終結したいの」

「和平？うちとしては有り難いけど、どうして？」

「もちろん条件は有るけどね、それはBクラスに戦争の準備をしてあると警告してBクラスを監視して欲しいの」

「どうしてBクラスを監視するの？」と愛子が姉さんに尋ねていた

「……雄二は、Bクラスとも和平交渉で終結させている。何かしらの策で、Bクラスを使って自分達に有利な条件で私達に挑んでくる…、その為の防御策」

と、まあ表向きはこんな理由だけど、実は裏では姉さんが小山さんを警戒して監視しやすくするためと言うとんでもない真実があったりする；

どうやら、小山さんが雄兄のことが気になる発言をしたのを姉さんの耳に入ったらしく、今強く小山さんを警戒しているのだ……、姉さんどこからそう言う情報を集めてくるんですか；；

そんな理由だとは思いいしないで小山さんは少し悩んでいた

「あ、そっか、Bクラスの代表は小山さんの彼氏だったけ？

やっぱり彼氏のクラスを監視なんて出来ない？」

愛子がそう尋ねると何やら決意した顔で

「いや、やるわ！それに結果的とはいえ、CクラスがBクラスに利用されてた事は間違いないし、恭二には意趣返ししてやらないと気が済まないしね」

ちよつと意地悪い顔をしてそう答えた

「……それじゃあ、そう言うことでよろしく。では、これで戦後対談を終了します」

姉さんがそう言い、戦後対談は終了した

戦後対談が終了してふと見ると優子と小山さんが話をしているのを見かけた

「本当にごめんなさいね？小山さん」

「だ、だから、もうその話はいいつてば」

「あ、それとあの愚弟のことだけど」

ゴオオオオオオオ！！

あ、あれ？この場面に何故か既視感が……

「あの馬鹿の始末は任せておいて……、たっぷりお灸を据えておくから！」

ガタガタガタガタ（。□。；）

「う、うん、お任せするわ……」

小山さんどん引きしてるし；

「あ、あのさ、Aクラスの代表がさ、ずーっとこっち見てるんだけど？……私、『そっち』の趣味はないんだけど？」

振り返って見ると、ジーと小山さんを見つめる姉さんが；

姉さん？そんなことしてるから同性愛者で誤解されるてわかってます？；

と、とにかくこうして、戦後対談とFクラスに対する防御策が講じられた

その日の夜

木下宅

「ただいまなのじゃ」

「お帰りなさい、秀吉^{ニコッ}」

「ど、どうしたのじゃ？姉上」

「あのさ、秀吉、Cクラスの小山友香さんて知ってる？（ニコニコ）」

「はて？誰じゃ？（ダラダラと汗が）」

「ふん、そっか、ガシッ（秀吉の腕を掴む）」

「ど、どうしてワシの腕を掴むのじゃ？」

「アンタ、Cクラスで何をしたのかな？どうしてあたしがCクラスの人達を豚呼ばわりしてる事になってるのかな？（ニコッ）」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測し、てえええええ！？（真上に投げ飛ばされる）」

「やっぱり、あんたの仕業、か！！！！？（下に落ちてきたところを、アルゼンチンバックブリーカー！！）」

グキ！！　ぐはああ！！

人知れず漆黒の夜に一輪の尊い命と言う花が散った…

第十二話 戦後対談（後書き）

ご意見感想お待ちしております（ ）（ ）

第十三話 悩み（前書き）

今回は短めです(^_^;) 相変わらずの出来ですが見てやって下さいm(_ _)m

第十三話 悩み

AクラスとCクラスの戦後対談が終わった翌日の朝

「……おはよう、夢希」

「おはようございます、姉さん。もうちょっとしたら朝ご飯出来るんで先に顔洗ってきたらどうですか？」

「うん、そうする」

朝食を作っている途中で、姉さんが眠たそうな目で起きてきました。

珍しいですね、あの姉さんが。夜遅くまで起きていたのだろうか？

姉さんが顔を洗っているうちに朝食が出来上がった

パンにコーヒー、サラダ、ハムエッグと朝食の王道的なメニューだ

『いただきます』

「姉さん、なにかあったんですか？姉さんがそんなふうに起きてくるなんて珍しいですし」

「…うん、ちょっと悩み事があって、…色々考えていたら眠れなくなっただから」

「悩み事、ですか？」

「…うん、…ねえ？夢希、今日のお昼時間ある？少し相談に乗って貰っていい？」

いつもの姉さんとは違って、なんだか不安で心配そうに聞いてきた

「ええ、わかりました。それじゃあ、朝ご飯食べましょう！朝はしっかり食べないと力が出ませんからね！」

「うん」

悩み事って、一体何だろう？

朝食を済ませ、姉さんと一緒に家を出て学園に向かっていると前方を優子と腰をさすりながらトボトボと登校している秀吉君を見つけた

「うう、昨日はひどい目にあったのじゃ」

「あんたのせいでしょうが！自業自得よ」

「優子、秀吉君、おはよう」

「二人とも、おはよう」

「あ、代表に夢希、おはよう」

「二人とも、おはようなのじゃ」

「秀吉君、どうしたの？腰でもって打ったの？」

「う、うむ、実は昨日、あね」

「昨日、足を踏み外して、階段から転んじやったのよ、ねえ？秀吉」

「いや・昨日は、姉上が・」

「そ・う・よ・ね？秀吉？（ニコッ）」

「そ、そうなのじゃ、足を踏み外してしまつての・あ、あはは・」

「そうなんだ、気をつけなくちゃ駄目だよ？秀吉君。（ニコッ）」

どうやら昨日、酷くお仕置きされたらしいな、あれは……

「代表？どうかした？なんだか元気ないみたいだけど？」

どうやら優子も姉さんの異変に気付いたようだ

「…うん、大丈夫。ちょっと寝不足なだけだから」

「そう？あまり無茶しちゃ駄目よ？代表」

しばらく歩いていると優子がそっところちらに近づいてきて、姉さんに聞こえないように小声で

「ちょっと、代表どうしたの？」

「なんか悩み事があるみたいなの。今日のお昼休みに話を聞くつもりなんだけど優子も相談にのって貰える？」

「ええ、わかったわ。あと愛子にも声かけておくわね、意見は多い方がいいし」

私が頷くと優子は姉さんに気付かれないようにそっと離れた

お昼休み 屋上

「…夢希、待たせてごめ、……優子に愛子？」

私以外に誰がいるとは思っていなかったのか、驚いた様子でこちらを見ていた

「話は夢希から聞いたわよ、水臭いじゃない代表」

「そっだよ？代表」

「私が頼んで来て貰ったんです。親しい人達にも聞いて貰ったほうがいいかと思って。……駄目でしたか？」

私が不安げに聞くと姉さんは柔らかい表情で

「うっん、大丈夫。優子や愛子にも聞いて貰おうと思っていたから」

「それで、何に悩んでいるの？代表」

優子が問いかけると、どうやって切り出せばいいかわからないように、しばらくしてからようやく姉さんの重い口が開いた

「……Fクラスの思惑、うっん、雄二の思惑にあえて乗りたいの」

第十三話 悩み（後書き）

ああ、スラスラと書ける文才が欲しいです（・・・） ご意見、
感想お待ちします

第十三話 悩み その2（前書き）

相も変わらずのグダグダな作りですが、良かったら見てやって下さ
い m ((m

第十三話 悩み その2

「Fクラスの思惑、ううん、雄二の思惑にあえて乗ろうと思つた」

姉さんのその一言で一瞬時が止まった

「な、何を言っているの！？代表！！Fクラスの策の要のBクラスはCクラスに抑えて貰ったことによつて策は封じてるし、このままFクラスが宣戦してきたら簡単に勝てるのよ？」

優子が慌てて姉さんに問いかける。確かに優子の言うとおりだ、わざわざリスクを背負つてあつちの思惑に乗る必要性はどこにもないのだから

優子にそう言われても姉さんは慌てることなく冷静だった。まるで、そう言ってくることを予想していたかのように

「だから、こちらの言う条件を飲ませる」

「条件？」

「負けた方は勝った方の言うこと聞くこと……」

「それならさ？FクラスがCクラスにしたようにさ、ボクらがFクラスを挑発して、向こうの策に乗らずにこっちの条件を飲むように仕向けてみるのは？」

愛子がそう提案すると

「そうよ！代表！Fクラスはバカの集まりだから上手くいくかもしれないわよ？」

優子もその提案を推したが

「…ううん、それだと雄二は条件を飲まないと思う。

雄二は自分が関係ない時はやる気出さないけど、自分が関係している時の雄二はそのやる気は半端じゃない。

昔言われていた神童そのものの、だから挑発のような小手先じゃ雄二は動かない」

「でも、神童って言ってもそれは昔の事でしょ？今は違うでしょ」

「ううん、やる気を出した時の雄二は今でも神童」

きつぱりと優子にそう言った姉さん

付き合いが長く、よく見ていないと言えないことだ

「まあ、坂本君がどんな人物かはわかった。それで？向こうの思惑に乗ってまでして、代表は何がしたいの？」

「雄二には私と付き合ってもらおう」

「……………は？」

姉さんのいきなりの発言に思考がついていけないのか、優子は唖然とした表情していた

「やつぱりそうでしたか姉さん」

「やつぱり？一体どういうこと？夢希」

「姉さんは小学生の頃から雄兄のことが好きなんだよ」

『ええええええ！？』

優子と愛子が大声をあげて驚いた、まあ同性愛者だとか噂が流れて

いたので変な誤解していたのも無理はないけど；

「じゃあ、どうして女の子だけ見つめてたりしたの？」

優子がそう尋ねると

「雄二に悪い虫が付かないように見張ってた」

「あ、あはは…、そうなんだ…」

「だったらこんな面倒くさい方法しなくてもすぐ告白すれば良いんじゃないの？」

そう優子が姉さんに疑問をぶつけてみると

「雄二には何度好きって言っても、断られてる」

「え…？そ、それって誰か他に好きな人がいるとかじゃないの？」

「まあ、雄兄に好きな人がいれば姉さんもあきら「絶対に諦めない」
…」

諦めるだろうと言おうとした所を姉さんが強い口調で打ち消した；

「ま、まあ雄兄に好きな人がいるわけじゃなくて、姉さんの想いは誤解だとか、勘違いだとか言って姉さんの事避けてたの」

「なるほどね、それで今回この勝負に勝って晴れて付き合って貰おうってこと？」

合点いった様子で優子が姉さんにそう聞いた、勿論姉さんもそうだと言わずと姉さんを見ると何故か姉さんの表情が曇った

「…うん、でもこのままやっていいのかなと思うのもあるの。」

試召戦争はクラスの命運かけて一団となって行っやるもの

それを私個人の我が儘で危険をおかして、……それでもし負けることになったりしたら…

でも、雄二が向こうから来るチャンスなんてそうはないし、もしこれを逃せば次いつ巡ってくるか分からない……

優子、愛子、夢希、私やつてもいいのかな？」

「優子、どうする？」

「優子…」

私と愛子は優子の返事を待った

しばらく目を閉じて思考を巡らせていた優子だったが、結論が出たのかゆっくり目を開けると姉さんのほうを見ると

「……やっても良いんじゃない？代表」

「優子…」

「代表、私達Aクラスは常に勝利のみよ、敗北なんて言葉は私達には存在しない

不利な条件？いいじゃない上等よ！不利な条件から勝利してこそAクラス！……だから、代表は安心してやればいいのよ」

「まあ、ボクたちが頑張ればいいだけだしね」

「そうだね」

「愛子、夢希…」

「クラスのみんなには私から説明しておくわね。不満が出ても何とか説得して見せるから安心なさい」

「優子、本当にいいの？」

「まあ、Bクラスを抑える作戦が使えないのは惜しいけど、不利な条件から勝てば次にまたFクラスがこっちに戦争を起こさす気無くさせることが出来るかもしれない。

あそこさえ大人しくなればそうそう試召戦争は起きやしないだろうし」

「優子、愛子、夢希…、ありがとう」

「代表、絶対に勝ちなさいよ」代表の想いの大きさ、坂本君に思い知らせてあげなさい！」

「うん！任せて」

……何故だろうか、なんだか雄兄に命の危険が迫っていきそうな気がするのは……

私がそんな事を考えている時、隣にいた愛子がなにやら思い付いたことが浮かんだようで優子に耳打ちしていた

（あのさ、優子、もう一つの恋も実らせない？（ニヤニヤ））

（もう一つ？……ああ、なるほどね〜（ニヤニヤ））

なにやら優子と愛子がこちらをニヤニヤしながら見ている……、どうしたのだろうか？、

まあ、なにとはともあれこうして、Fクラス戦に向け動き出したのであった

第十三話 悩み その2（後書き）

ご意見感想お待ちしております（＜―＞）

第十四話 駆け引き（前書き）

バカテスの9・5巻のカラーページを見て驚きました、そこに書かれてある翔子がまさしく夢希のイメージそっくりでした！まだ9・5巻読んでない方は見てみて下さい（＾Ｏ＾）

相変わらずな出来ですが良ければ見てやって下さいm（――）m

第十四話 駆け引き

姉さんの強い要望からあえてFクラスの策に乗る、という方針で固まり優子がクラスのみんなにFクラスの策に乗ること、その策に乗ることになった原因、雄兄と姉さんとの関係などの経緯などを説明をした上で採決を取ると満場一致で可決された

その理由は、女子は『代表が可哀想』

『代表の想いを一方的に決めつける坂本君酷い!』

『代表の長年の想いを叶えてあげよう!』

などなど恋する乙女を応援するぞという感じで全面的に姉さんを支持し、男子は

『憧れていた霧島さんにそんな仕打ちを…、坂本、コロス』

『霧島さんに何度も好きだと言われただど!!…坂本、コロス』

『憎き坂本雄二、こうなれば試召戦争のどさくさに紛れてやつを…』

などなど、殺意的に一致し、可決されたという形である

まあ中には

『吉井君！吉井君と戦うなんて！許して欲しい、マイスイートハニ』

となにやらかなり危険な独り言を言っていた久保君を見たような気がするが……

うん♪見なかったことにしよう♪知らないほうが幸せなこともあるよね♪

可決され一段落したところに

「Aクラス代表はいるか？俺はBクラス代表のピーー（効果音）だ」

モザイクの掛かったBクラス代表のピーー（効果音）が来ました

え？何故モザイクとピー音が入っているのか？

そんなの自主規制にきまつてるじゃないですか♪

モザイクを入れたのは心臓の弱い方があんな女子の制服をきたおぞましいモノを見たらそれだけで即倒しちゃうかもしれないでしょ、ピ音入れたのは同姓同名の人の名誉を汚さないためですよ」

「夢希、誰と喋ってるの？」

愛子につっこまれてしまったのでこの辺にしておきましょう

「代表の代理で、わたし、！？…が、聞かなきゃ駄目よね」

姉さんの代理に受け持とうとした優子が前にいるアレを見て後ずさる

その顔には『しまった；受けるんじゃないか；』といかにも書いてありそうな表情だった

「Bクラスは、Aクラスに対して戦争の用意がある。今日は警告を言いに来ただけだ」

「そ、そう；わかったわ；」

アレがそう言っているとFクラスの生徒に連行されていた

「キリキリ歩け、これから撮影会もあるんだからな」

「き、聞いていないぞ!」

……撮影会? どうやら私の知らない所で恐ろしいことが進行しているようです；

「優子、大丈夫? ;」

「だ、大丈夫；、ただこの一週間はうなされそうよ；」

優子が心配で声をかけて見ると、少し青ざめた表情だった

「でもまあ、読み通りBクラスを脅しに使ってきたわね」

「うん、だとするとそろそろ……」

「失礼するぞ、Aクラスの代表はいるか?」

「来たわね」

教室の入り口のほうを見るとそこには雄兄を中心に吉井君、瑞希、土屋君、美波、秀吉君とFクラスを中心グループがやってきた

「俺はFクラスの代表の坂本だ。Aクラス代表はどこだ？」

「私が代表の代理に聞くわ」

優子がそう言う前に出た

「そうか、……、俺達FクラスはAクラスに一騎打ちを申し込む！」

「一騎打ち？」

「そうだ、俺達Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

「うーん、何が狙いなの？」

優子が訝しい目で雄兄を見ていた。

裏に何かあるのか見破ろうとせんとばかりに

「もちろん、俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「……、面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのは有り難いけどね、わざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな、ところでCクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

それを聞いた優子は眉毛をビクンと動き、一瞬ギロと秀吉君を見ると秀吉君は蛇に睨まれた蛙のように動けずガタガタと震えていた

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

「Bクラスとやりあう気はあるか、ってだ、大丈夫か？…なんだか顔色が悪いが…」

Bクラスと聞いた時、優子の表情が青ざめたものになっていた

「B、Bクラスってさっき来てたあの変態女装の…」

「ああ。アレが代表やっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされてないよいだが、どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、3ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

戦争に敗北したクラスは3ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことができない。

これは負けたクラスがすぐさま再戦を申し込んで、試召戦争を泥沼化しない為の取り決めである

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にあの戦争は「和平交渉にて終結」ってなっていることを。規約になんの問題はない。…BクラスだけではなくDクラスもな」

雄兄が悪役みたいな態度で交渉を仕掛けてきた。しかし…

「へえ、それは奇遇ね。私達もCクラスとの戦争は「和平交渉にて終結」なのよね。」

「なんだと!?」予想していなかった事態だったのだろう、雄兄が大きい声を出して驚いていた

「…Bクラスに戦争の用意があると警告して、もしくは攻めてて条件つきだね」

果たしてBクラスは動けるのかしら？まあ、Dクラスがこちらに仕掛けてくるなら別に良いけどね、Bクラスに比べたら楽な相手だしね」

優子是这样言っているが攻めるとは言っていない。恐らく雄兄の動揺を誘うためのブラフ…優子恐ろしい子！？

これにより自分たちに有利に交渉するカードがなくなり慌て始めるFクラスに対してAクラスから魅惑的なカードが切られる

「こちらの条件を呑んでくれるなら、今回の試召戦争、五対五の団体戦にしてあげる」

駆け引き その2 (前書き)

今回は短めです(- - -) 今月は忙しく更新が遅れるかもしれ
ませんがご了承下さいm (-) m

駆け引き その2

「こちらの条件を呑んでくれるなら、今回の試召戦争、五対五の団体戦にしてあげる」

「条件だと？」

優子がにこやかにそう言うのと今度は雄兄が訝しい目で優子を見ていた、何が狙いだと言わんばかりに

「ええ、こちらの条件は二つ、まず一つは、先鋒はこちらは霧島夢希 そちらはうちの弟 秀吉を出すこと」

「ちょ、ちょっと！優子！？」

いきなり出てきた事に驚きを隠せなかった

しかも対戦相手が自分の想い人なのだからなおさらだ

「ちょっと；、優子！そんなの」聞いてない、と言おうとしたところを姉さんの

「…もう一つは、負けた方はなんでも一つ言うことを聞くこと」

姉さんのこの一言で、私の抗議の発言は打ち消された

『え?…』

『負けたほうは……なんでも……』

カチャカチャカチャカチャカチャカチャ

「ムッソリーニ、まだ撮影の準備は早いよ!というか、負ける気満々じゃないか!」

「明久、そう言いながらもお主もカメラのレンズを磨いておるではないか!ムッソリーニ!何故儂のほうにもカメラを向けて調整しておるのじゃ!…」

姉さんのあの一言で慌てだすFクラスの面々……、まあろくなことではない事は確かだろう;

「わかった、その条件呑もう」

「雄二！！なにを勝手に！まだ姫路さんや秀吉が了承してないじゃないか！」

「なんでそこに僕が入っておるのじゃ！？明久！」

「心配すんな。絶対に二人に迷惑はかけない」

自信満々の台詞。そこまで勝利を確信させる秘策でもあるのだろうか

「ただし、勝負内容はこちらで決めさせてもらう。それくらいのハ
ンデがあってもいいだろう？」

「うゝ、うゝん…」

「…構わない」

「ちょゝ、代表？」

「…お願い、優子」

そう言われ、にこやかな顔から悩み顔になった優子が色々思考した

結果

「じゃあこうしましょ、勝負内容の五回の内三回をそっちで決めさせてあげる。それでどう？」

「まあ、それが妥当か…、交渉成立だな。それでいつやる？」

「そうね…、明日、いや明後日の放課後にしましょう」

「ほう、結構間が空くが？」

「構わないわ、この間に勉強してベストな点数で挑んで来なさい！
返り討ちにしてあげるから」

「ふつ、Aクラスには素敵なちゃぶ台をプレゼントしてやるから楽しみに待ってな」

両陣営火花を散らしながら交渉は終了した

第十五話 決意（前書き）

このお話の秀吉は演劇の参考に歌舞伎座など見ていたりしている、
という設定にしていますのでご了承下さいm（ ）m

相変わらず出来ですが良かった見てやって下さい

第十五話 決意

「やれやれ…、えらい事になってしまったのう。」

「そうだね。」

そう溜め息混じりに秀吉君と同じことを呟いていた

あの交渉の後、私は屋上に向かい、そこで秀吉君と合流した。演劇部が休みの日はこうして屋上で秀吉君のお手伝いをするのが当たり前のようになっていた

しかし今の空気はどんよりとしていた。それもそうだ、いきなりそれぞれのクラスの代表の先鋒として指名され戦わねばならなくなつたのだから

「しかし、何故姉上は僕らを戦わせようしたのじゃろつな？」

「な、なんでだろうね…あ、あはは。」

秀吉君の疑問に適当に受け答えしていた

まさか優子や愛子にあんな事言われるなんて；

今から１０分前に遡る……

「ちょ、ちょっと優子、あれは一体どういうことなの！？…あんな話聞いてないんだけど…」

Fクラスとの交渉が終わって私は優子に質問をぶつけていた

「そりゃあそうよ、こういう風になるまで言うつもりなかったし」と、さも当たり前のような顔であっさりと答えた

「な、なんで言わなかったのよ！？…」

「言ったらあんた反対するでしょうが」

「反対するに決まってるよ！？…」

あっけらかんとそう言う優子に噛みつきつとしていると

「まあまあ、落ち着きなよ夢希。よく考えてみなよ？これはチャンスなんだよ？」

「チャンス？」

愛子にそう言われて考えてみる、この状況で私にとってはチャンス？と考えているところに愛子がヒントとばかりに

「それじゃあね、代表がなんて言っただか覚えてる？」

姉さんが言ったこと？え、え〜と、確かあの時姉さんが言ったのは

『負けた方は何でも一つだけいうことを聞くこと』だったようない…
…うん？うん！？これってもし私が勝ったら秀吉君のことを！？

「どうやら気付いたみたいね、夢希が勝ってアレを彼氏にしたら良いじゃない」

衝撃的な事実がわかったところに優子が爆弾発言を持ってきた

「な、な、なに言ってるのよ……優子!？」

「何って、夢希あんた告白する機会狙ってたじゃない? ちょうどいいチャンスじゃない?」

「うゝ、そりゃあそうだけど……」

「うかうかしてたら他の誰かに取られちゃうわよ? ……特に男子から」

「へ? 男子?」

「そうよ、あいつよく朝学校に行く途中で男子中学生から告白とかされてるらしいし。あととても不愉快だけど三年の先輩からラブレター預かったことがあるわ……弟に渡してくれって……」

そう言っとプルプルと震えだし

「なんでアイツのほうがモテるのよ!?? っていうかなんでアイツへのラブレターなんか預からないといけないのよおお!!!!」

それはまさしく魂の叫びだった。優子も色々と苦労してたんだな;

「まあまあ：優子落ち着きなよ：　なんにせよ弟君と戦うことになつちやたんだから前向きに考えていけば？」

「前向き、か…、でも、もし告白して断られたらどうしよう…」

「大丈夫だって：上手くいくよ：（ほぼ両想いみたいなものののに、どうしてこういうことに関しては疎いかなこの子は…）」

なんだか少し呆れた目で愛子に見られているようなのは気のせいなのだろうか？

そして今に至る

（うーん：告白か、上手くいけばいいけど…ああ：でも、もしだめだったどうしよう…）と　うーんうーんと唸っていると

「どうしたのじゃ？夢希、うーんうーん唸って頭でも痛いのかの？」と心配そうに秀吉君が私の顔を覗き込むように見ていた

「な！？な、なんでもないよ？：気にしないで：、あはは…」

顔を真っ赤にさせながらなんとか誤魔化した；

ふと顔を見上げたらそこに大好きな人の顔があったら誰だって真っ赤になるよ；

「それにしても僕と夢希を戦わせても夢希が勝つに決まっておるの
にのう」

「……どうして？」

「ど、どうしてじゃと？そりゃあ僕がFクラスで夢希がAクラス、
戦力の差は明らかじゃろ？」

「やる前から諦めちゃうの？私がリハビリで苦しんでいるときに助
けてくれたように今度は私が秀吉君を助けるから頑張ろ？」

「夢希…、そうじゃな！何もせずに諦めるのは駄目じゃな！いつち
よやってみるかの！」

そう言つと秀吉君は可愛らしく力こぶを作る格好をした、相変わら
ず可愛いな♪

「しかし、夢希には悪いが手伝いはいいのじゃ。その気持ちだけ受け取っておくのじゃ」

「どうして！私秀吉君の力になりたいのに！」

「いや、儂の対戦相手、夢希じゃろう？…その対戦相手に教わるのはちよつと不味くないかの！」

「あ…。」

そうでした、すっかり頭に血がのぼっちゃって忘れてた；

「儂のほうで出来るだけのことはやってみるつもりじゃ。ただし、やるからには夢希に勝つつもりでやるからの」

「…うん！私だって負けないよ。…秀吉君は演劇の参考とかで歌舞伎座とか見たりしてよね？」

「うむ、そうじゃが？」

「なら古文あたりなんかいけるんじゃないかな？」

「まあ嫌いな教科ではないの」

「なら当日は、古文で勝負しよう」

「僕はそれでいいのじゃがいいのかの？夢希の得意科目ではなくて？」

「うん、秀吉君とは対等な状態で戦いたいしね。…、そ、それでね？もし、その、私が勝ったら聞いて欲しいことがあるんだけど…、いいかな？（〃〃）」

「まあ、負けたほうが言うことを聞くのが今回の条件じゃからの」

「いやゝ、そういう条件じゃなくて、私個人の純粋なお願いなんだけど、いいかな？」

私がそう話すとこちらの心情を汲み取ったのか真剣な表情で

「わかったのじゃ、じゃが」と言っただと思っただけ柔らかい表情になっ
て

「それは勝負に勝ったらじゃろ？僕は負けんぞ」と言った。それは本当に優しげな顔だった

第十五話 決意（後書き）

なんとか更新出来ました（^ー^；）
なんとか更新早く出来るように頑張っていきたいと思います（ノ
T）

第十六話 決戦に向けて（秀吉編）（前書き）

今回は秀吉目線のお話となっております。いつも通りの出来ですが良かった見てやって下さい；

第十六話 決戦に向けて（秀吉編）

Side 秀吉

あの後、夢希と二人で互いに戦いに向けて精一杯努力すると約束し別れた

「勝つと言ったものの今のままではどうしようもないのが現状なのじゃ」

決戦まで今日を入れてもあと2日と当日の補給試験までの数時間…、その間で夢希と対等に並べる点数を取るのはまず無理じゃろうな；

ならば、対等な点数にするのが無理でも少しでも近づけるよう点数を稼ぎ、足りない分を召喚獣の操作性で補わなくてはならぬ…

しかし、お世辞でも僕は召喚獣の操作性それほど上手くはないし得意科目もこれと言ってないしの…うーん…これは不味いのじゃ；

うーんと唸りながら自分の教室に戻るとそこにはいつもの光景が飛び込んできた

「吉井！貴様、また学校にゲーム機を持ち込んだな！」

「げ！？鉄人！？；」

「西村先生と呼べと言っているだろうが！」ドガ！？（頭にげんこつを）

「痛っ！！？可愛い生徒に手を挙げるなんて！教師がやっていいんですか！？」

「吉井、勘違いするな……」

「へっ？」

「お前は不細工だ」

「最低の教師だああ！？」

やれやれ、またやっておるの明久は；。大方教室でこっそり携帯ゲーム機で遊んでいた所を鉄人に見つけた、といった所かの；

そんなことをやっておるから観察処分者の仕事がどんどん増えるというのに……観察処分者？

確か観察処分者のおかげでいろんな先生の雑用で召喚獣の操作性が飛躍的に向上した明久、そして隣にいる鉄人、もとい、西村教諭

鬼の補習で恐れられておる先生じゃが召喚フィールドを全科目担当出来るらしいのでかなりの学力を持っているのは間違いないのじゃ……

今儂が必要としている2つの要点がここに揃っておる。

二人ともある意味曲者じゃが短期間で効果を出すにはこれほどうってつけな人材いまい。ならば儂が取る道は一つしかない！

「西村教諭！！明久！！折り入って頼みがあるのじゃ！！」

「ど、どうしたの秀吉？…そんな大きな声出して」

「なんだ？一体どうした？木下」

いきなり大きな声で話しかけられたせいか驚いた様子でこちらを振り替えた

「西村教諭、儂に古文の補習をして欲しいのじゃ、Aクラスと互角に戦えるくらいな点数を取れるくらいに！」

「何？Aクラスだと？木下、確かに大きな目標を持つことは良いことだがいきなりすぐは無理に決まっているだろう？こういうものは時間をかけ少しずつ」

「それでは駄目なのじゃ！！2日後の補給試験で取れるくらいにならないばならんのじゃ！！西村教諭！この通りじゃ！」

そう言うつと儂はその場で座り込み頭を床に付けた

「秀吉！？いきなり何やってるの！？？」

明久の慌てる声が聞こえる。まあいきなり土下座をするのだから驚くのも無理はないが

しばらくするとそんな儂を何も言わずただ黙って見ていた鉄人が口を開いた

「木下、理由はなんだ？普段勉強そっちのけで演劇に没頭している

お前が自発的に俺の所で補習をしてくれとは考えにくい…理由はなんだ？」

そう言われ顔を上げると、そこには儼の真意を見抜こうと目つきが普段より厳しくなっている鉄人がいた

「…約束を守るためじゃ」

「約束？誰とだ？」

「……………」

「言いたくはないか……、理由は個人的な約束を守るために俺に補習をしろ、と…、動機はまったくもって不純……」。

だが他の先生方ではなくあえて鬼の補習と恐れられている俺に補習を頼むその心意気、気に入った！

いいだろう！望み通りこの俺が教鞭をふるってやる！ただし！いつもやっている補習よりも数倍キツイものだど覚悟しておけ！いいな
！！」

「いいのかい！？秀吉！？鉄人の補習なんだよ！？生きて戻って来

れるかどうか…」

隣で明久が慌てふためいていると

「吉井、特別に貴様も参加させてやる、ありがたく思え」

「いいです！？結構です！？日常的に受けてるんで間に合ってます
！？」

「明久よ、今回お主の力も貸して欲しいのじゃ！」

「へ？僕の力？」

「そうじゃ、僕の召喚獣の操作性を上げるためにはどうしてもお主
の力が必要なんじゃ！頼む！明久」

僕はそう言つと両手を明久の両肩に置き、強い決意の目^{のつもり}で明久を見た

明久ビジョン

ど、どうしよう！？いきなり秀吉が両肩を掴んでまるで恋する乙女

のような目で上目使いでこっちを見ながら力を貸して欲しいと言ってきている！

この目をお願いされて断るなんて僕には出来ない！！

「フツ、わかったよ…、女の子にここまでお願いされたら断れないよ。火の中、水の中、補習の中、何処でも付き合つよ秀吉^{キリツと}」

「そうか！礼を言うぞ明久！って僕は男じゃと言っておるじゃろっが！！！」

とまあこんな感じで儂等二人の補習という名の特訓が始まった

第十六話 決戦に向けて（秀吉編）（後書き）

次回は夢希編を予定しています。なんとか早めに更新出来るように頑張ります（＾－＾；）

決戦に向けて（夢希編）

屋上で互いに精一杯の努力をしようと約束して秀吉君と別れた私はその足で本屋に向かった

本屋に着くと真っ先に古文の参考書や問題集が置いてあるコーナーに向かった

参考書や問題集は色々あり自分に合った本を吟味し時間をかけてようやく買う本を決めレジに向かおうとした時見知った顔を見つける

「あれ？もしかして瑞希？どうしたのこんな所で？」

「え？あ、夢希ちゃん！ちょっと参考書を買いに来てたんです。夢希ちゃんもですか？」

「うん、って！？瑞希、結構な数買ったね。参考書」

「あゝ、はい。」

瑞希の買い物がこを見るとそこには幅が太い参考書が五冊ほど入っていた

その後会計を済ませると、私と瑞希は近くのファミレスに立ち寄ることにした

「しかし、たくさん買ったね……やっぱりAクラス戦に向けての学力アップのため？」

「あゝ、は、はい。」

ちよつと気まずそうに瑞希はそう答えた

まあ無理もないだろう、次に戦うクラスの一人にこう聞かれたら答えにくいものだろう

「……私、Fクラスが好きなんです。Fクラスのみんなのための力になりたいんです」

「Fクラスのどこが気に入ったの？」

「人のために一生懸命になれる所とかです」

「ふん……」

私がじーと見つめていると耐えられなくなったのか

「な、なんですか?」

「そのFクラスが好きの気持ちの大半は、吉井君なのかな?」

「え?...えええ!?え、えっと、それはその(〃〃)」

ニヤニヤしながらそう聞いて見ると顔を真っ赤にさせ、どう答えて
いいかわからずあたふたしていた

分かりやすいなと思っていたら

「そ、そういう夢希ちゃんこそ木下君とはどうなんですか!?」

「え!?!えっと、それは、そのね、って!ど、どうしてそんなこと
知ってるの!?!」

「愛子ちゃんから教えて貰いました」

愛子のやつゝゝ、いつの間に；

「夢希ちゃん、顔が真っ赤になってますゝ分かりやすいですね」

うつゝやり返されてしまった；

「あ、あははゝまあお互いそういう面は苦労してるみたいだねゝ」

「まだ夢希ちゃんはいいですよ、木下君そういうのにも気づいてくれそうですもん。私のほうは……はあゝ」

「あ、あははゝ、吉井君そういうの鈍感そうに見えるよねゝ」

「見える、じゃなくて鈍感なんですよゝ」

瑞希もなんだかんだで苦労してるんだな

そして、次の戦いは自らの想いや好きな人のためにも負けられない戦いなんだなと思いつつ互いのコーヒーを飲み終わると

「さてと、そろそろ帰りますかね！帰ってこれやらないとね」

さっき買った参考書をチラッと見ながら立ち上がる

「私はここでちょっと解いたら帰りますね」

そう言つとさっき買った参考書を袋から出すとさっそく参考書を開いた

「そっか、それじゃあまたね。…お互い頑張ろっね！」

「はい！」

そう言つて私は瑞希と別れ帰宅した

帰宅して、夕飯を済ませ、さっそく買った参考書を開き勉強してしばらく経った頃、姉さんが私の部屋にやってきた

「…夢希」

「姉さん？どうかしましたか？」

「どこか解らない所ある？あれば教える」

何か期待する目でそう言ってくれる姉さん。うーん、大変ありがたいのだけれど

「すみません、姉さん、一人でなんとか頑張ってみようと思います。」

「…そう。わかった」しょんぼり

↑グサツ ↑グサツ ↑グサツ、うぐう！？ざ、罪悪感が；

罪悪感に陥っているところに姉さんが一杯のコップを私の机の上に置いた

「これ飲んで頑張つて。余り無理はだめ」

コップの中身はレモネードだった。気を使ってくれたのだろう

「ありがとうございます、姉さん、姉さんの言つとおりに無理はしませんよ」

私がそう言つと安心したのか堅い表情が柔らかくなつたように見えた

「…夢希」

「なんですか？姉さん」

「今度の勝負、絶対に勝とう」

「はい、勿論ですよ姉さん」

私達は必ず勝つことを心に誓つた

第十七話決戦！！試召戦争Fクラス戦

Fクラスとの交渉から2日が経ち、補給試験を済ませ決戦まであと数時間後に迫っていた

S i d e Aクラス

「いよいよFクラスとの試召戦争が始まるわ！

今回はクラスの代表五名の五対五の代表戦で勝負をつけることになっているわ。

この勝負でAクラスとFクラスの力の差を見せつけ、Fクラスが二度とこちらに試召戦争を起こさせないようにするわよ！」

優子がそう言うところ「おおー！！」と教室内のボルテージが上がった

「こちらの代表メンバーは、霧島夢希、佐藤美穂、工藤愛子、久保利光、そして代表の霧島翔子、うちはこの五人でいくわ」

Aクラスの代表メンバーが発表されると教室内から

「Fクラス相手に木下さんも容赦ないな」

「Fクラスも可哀想に」

などとFクラスに対して余裕や見下す発言が飛び出したが優子は少しも表情を変えずに代表メンバーを自分の前に集めた

「いい？今クラス内はたかがFクラス程度と思っているけどDクラスもBクラスもそう思って隙を突かれて敗北しているわ。

だから格下相手だとは思わず同格の相手として戦って。決して油断しないように」

「わかりました！」

「分かったよ、全力を持って相手にするよ」

優子にそう言われ気合いを入れ直すメンバー

「でも初戦は大丈夫じゃない？こう言っちゃなんだけど夢希と弟君じゃ点数差がありすぎて勝負にならないんじゃないかな？」

愛子がそう言っても優子の表情は変わらなかった

「確かに以前のままのアイツならべつに気にすることもなかったんだけどね」

「というと？」

「アイツこの2日家に帰らず学校に泊まり込んでたみたいなの。なんでも西村先生の特別補習を受けるとかで」

「特別補習？」

2日前の夜

「はい、もしもし木下ですが？」

『おお、姉上か？儂じゃ、秀吉じゃ』

「なんだ秀吉か、それでどうかしたの？」

『うむ、実は今日から2日間学校に泊まり込んで西村教諭の特別補習を受けることになったの。』

それで姉上から母上達に学校に泊まり込むことを伝えて欲しいのじゃ。』

「特別補習？学校に泊まり込んで？」

『うむ、西村教諭が宿直室に寝泊まり出来るように学園長に掛け合ってくれての、って！？あ、明久！？お主頭から煙がでておるが大丈夫か！？気をしっかり持つのじゃ！明久！？明、プツ、ツーツー』

「ちょゝ、ちょっと！？秀吉！？秀吉！？」

「と、まあこんなことがあつてねゝ」

「そ、それで吉井君は大丈夫だったの？ゝ」

「だ、大丈夫じゃない？……多分；」

「ま、まあそれで今朝、アイツ帰ってきたんだけどその時の目つきがね」

「目つき？」

「うん、まるで演劇の本番に臨む時と同じ目つきになってたの。もしかしたらもしかするかもと思ってね」

「ふうん、ところでさっきから黙ってばかりだけど大丈夫？夢希」

「へ！？、あ、ああ；大丈夫だよ；」

いきなり話を振られたので変な声をあげてしまった；

「いや；全然大丈夫そうには見えないんだけど；」

苦笑いしながら愛子にそう言われてしまった； 他人から見ても分かるくらいガチガチに緊張しているようだ；

「あとちょっとで試合戦争が始まると思うと緊張しちゃって…」

「優子の弟君と戦うと思うと緊張しちゃっ…」

「ま、まあね…」

苦笑いでそう答えると、こちらの心情を察するとスッとこちらの背後に回り込むと

「フウ…」

「ひいや！？にゃ、にゃに！？今首の辺りに生暖かいなにかが…」

振り返るとそこにはいたずらが成功してニヤニヤしている愛子がいた

「愛子！…！」

「あはは、どう？緊張はほぐれた？」

「え？」

気がつくとあんだけガチガチになっていた身体の緊張がいつの間にか解けていた

「あんだけガチガチなっていたらいつも通りの力出せないよ？」

リラックス♪リラックス♪ 難しく考えないで楽しめばいいんだよ」

「楽しむ？」

「そうだよ、ボクは楽しみにしてるんだよ？ムッツリー二君と戦うこと。」

どっちが保健体育上か！ってね♪

だから夢希もあまり難しく考えないで楽しめばいいんだよ」

「そっか、…うん、そだね♪ありがとうね愛子♪」

「どういたしまして♪」

そして時間が経ち、Aクラスの教室にAクラスとFクラスの全員がそれぞれに分かれ集合していた

「それではこれよりAクラスとFクラスの試召戦争代表戦を行います！先鋒前へ！」

高橋先生にそう言われ、Aクラスからは私が、Fクラスからは秀吉君が前にでた

「では、教科は何にしますか？」

「古文勝負をお願いします！」

かねてからの約束通り古文勝負を選択した

「わかりました！承認します！」

高橋先生がそう言うのと教室内にフィールドが展開した

「いくよ！！秀吉君！」

「うむ！！全力で参るぞ！」

『試^{サモン}獣召喚！！』

こうしてAクラスとFクラスの試召戦争が幕を明けた

Fクラス戦 その2（前書き）

今回、オリジナル設定が入っていますのでご了承下さい
m（――）

いつもの出来ですがf^
|^
|^
;

Fクラス戦 その2

『サモン
試獣召喚!!』

二人が同時にそう言うといの召喚獣が姿を現した

Aクラス 霧島夢希
古文 327点

VS

Fクラス 木下秀吉
古文271点

そう表示されるとクラス内に『おおお!!』とどよめきが走った

Fクラスは歓喜、Aクラスは驚愕の声で

「やってくれるじゃない、あの馬鹿」

「そう言ってるわりには嬉しそうな顔してるけど?」

愛子にそう言われると顔を真っ赤になった

「べ、べつにそういう訳じゃないわよ！、夢希とぶつけて少しは効果があったなとあたしの判断は間違ってたと思ってただけよ！……」

「やれやれ、素直に喜べないのかな」このツンデレお姉ちゃんは
(小声)

「何よ？」ギロリ

「べつに」

「それにしてもまさか約50点差まで追いつけてくるなんてね」

「そうだね、これはボクも予想外だったよ」

「これはあいつの努力を誉めるべきなのかしら？それとも……」

「それとも？」

「あいつの点数をあそこまで引つ張り出した西村先生の鬼の補習の恐ろしさを再確認すべきなのかしら…」

「あ、あはは…どっちだろうね?…」

Fクラス Side

「凄いじゃない木下!あともう少しでAクラス級じゃない?」

「木下君頑張っていましたから」

「あの好成绩は秀吉の努力の賜物とそして…」

雄二がそう言つて隣に目をやると

「エラーデスえらーですError…デス」

脳内エラーが起きて頭から煙をあげている明久がいた

「このバカがこんな風になるくらいな想像絶する鉄人の補習のおかげなんだろう」

「アキ朝からずっとこの調子よ・大丈夫なの？」

「そうだな、そろそろ起こさないとな。ここはショック療法でいくか」

そう言うと雄二は明久の耳元で

「明久、このまま起きないと姫路にお前のために特製のスペシャルジュースを作らずぞ」

雄二がそう呟いた瞬間

「命だけは助けてくださあい！いいい！！」

「お、帰ってきたか」

「ゆ、雄二何てこと言っただよ！？もう少し友達」

「なんなら本当に姫路に作らせてもいいんだが？」

「友達思いの友人を持って僕は嬉しいよ！雄二」ニコッ

「そうか、分かってくれて何よりだ」

と明久と雄二が漫才みたいなことをしている一方で

「アキ、また坂本とあんなにくつついて…やっぱり坂本はウチらの敵なのかしら？」

「明久君はやはり男の子でもイケる口なんでしょうか！？；（泣）」

などとトンでもない誤解をされていることに二人は気付いていなかった

「ムツツリーニ、秀吉にあのことは伝えたか？」

「…すでに伝達済み。映像を通して教えてあるからバッチリ」

「ねえ雄二あのことって？」

「この一戦で押さえておかないといけないポイントだ」

夢希 Side

召喚獣を召喚した直後、私は一気に秀吉君の召喚獣に向かって私の召喚獣を突っ込ませた

秀吉君の召喚獣の武器は薙刀。

薙刀の長所はその長さによる間合い！

ならばその間合いを生かせない接近戦で一気に勝負を決める！！

開始直後ということもあってかいきなりの突撃に秀吉君の召喚獣の動きが一瞬止まった

その一瞬の隙をつき接近することに成功し、トンファーによる連続攻撃を試みた

「ハッ！！」

「くッ！？！」

こちらの連続攻撃に薙刀で防戦に入る秀吉君

ガードの上からお構い無しにトンファーの連続攻撃を入れつつガードの隙間を探し、そして

「そこ!!」

「しまっ!!」

ガードの隙間をうまくつき、崩れたガード

「貰った!!」

出来た隙間にすかさず蹴り技を打ち込んだ

すごい音と共に後ろに飛ぶ秀吉君の召喚獣

決まった!と思ったらずに立ち上がった。手には縦に持ち替えた薙刀があった

蹴りを受ける一瞬、薙刀の持ち方を縦に変え蹴りを防いだようだ

「そんな！完璧に捉えた筈なのに…」

秀吉 Side

あ、危なかったのじゃ； ムツツリーニからの情報がなければ間違
いなく貰っていたのじゃ；

開戦数時間前

「…秀吉」

「ん？どうしたのじゃ？ムツツリーニ」

「…見て欲しい物がある」

ムツツリーニが持ってきたデジタルカメラにはAクラスとCクラスの
の試召戦争が映されていた

「これがどうかしたのかの？」

「…この場面に注目」

そこに映っていたのは夢希の召喚獣の戦闘場面だった

「…このダメージ数に注目」

そこには夢希の召喚獣がトンファーで攻撃しているシーンだった

トンファーで攻撃を受けた相手の召喚獣にダメージ数20が出ていた

「…そしてこの攻撃シーン」

トンファー攻撃で怯んだ相手に追い討ちに蹴り技を打ち込んでいた

その時のダメージ数は

「150!？」

「…どうやら霧島妹の召喚獣は脚に多く攻撃力が設定されている。

なので武器のトンファーも注意だけどあの蹴り技はそれ以上に警戒」

そう言うともう一つのデジタルカメラを出し

「こっちにトンファーの攻撃から蹴り技に移るいくつかの予測パターンを編集した。」

これを見て対策を練るといい」

「わかったのじゃ、恩に着るのじゃムッツリーニ！」

「…b」

とにかくあの蹴り技だけは貰わないように気をつけるのじゃ

じゃが、守りに入ればいずれ追い詰められるのは必至……ならば！

今度は秀吉の召喚獣が夢希の召喚獣に向かって突撃した

「はああ!!」

勢いにのせて薙刀の刃を横にして放った

「なんの!!」

片手のトンファーで防ぐと、すぐさま回し蹴りを放つが

「その攻撃パターンは既に解析済みじゃ!」

その場でしゃがみ込んで回避すると薙刀を縦に持ち替え振り上げた

「くっ!?!」

突然の反撃に両手に持っていたトンファーをクロスするように構えなんとか防ぐが衝撃を殺すことは出来ず後ろに大きく飛ばされた

「…やるね、秀吉君」

「…そつちも、の」

激戦必至の戦いがスタートした

Fクラス戦 その2（後書き）

感想を頂けたら幸いです（<―>）

Fクラス戦その3（前書き）

たくさんの評価を下さった方々、感想を下さった方々、本当にありがとうございます！また再開しようとおもいます^^ 相変わらずの出来ですがよろしければ見て下さい

Fクラス戦その3

夢希と秀吉の戦いは開始早々激しい戦いが繰り広げられていた。それは一見互角の戦いに見えたがしかしそれは小さく、しかし確実に現れ始めていた

FクラスSide

「まずいな、これは・・・」

「まずい？なんでだよ？雄二、見てのとおり秀吉はあんなに善戦してるじゃないか？もしかしたら勝てるかもしれないのに」

「確かに善戦しているな、「今は」な」

「今は？ど、どういうことだよ雄二？・秀吉があんなに善戦してるのに」

「そうよ！どういうことなの？坂本？」

「わからないなら二人の表情を見比べてみる」

雄二にそう言われ明久と美波が前で激戦を繰り広げている両者の表

情を見てみるとそこに汗をかきながら少し苦しそうな顔で攻撃している秀吉。それとは対象的に落ち着いて冷静に秀吉の動きを見ている夢希の姿がそこにあった

「え？こ、これって一体どうして？」

「そういえばお前ら知らなかったみたいだが夢希はカポエラをやっている格闘技経験者だ」

「えええ！？・・・っていうかカポエラってなに？」

「カポエラってのは本来は間違った呼び名で正しい呼び方は「カポエイラ」もしくは「カポエイラ」と呼ぶらしい。足技を中心とした格闘技で本来は相手に攻撃を当てるのではなくプレッシャーを与える物らしいんだがそこをあいっは一戦交える物で護身術として身につけたらしい。」

「へえ〜詳しいんだね雄二」

「夢希が向こうにいた時からよく翔子に話を聞かされていたからなまあそれでだ、格闘経験があり姉の翔子と同じく天才肌の夢希のこただCクラス戦で召喚獣の操作性のコツを掴んだはずだ。それに対して秀吉はいくつか試召戦を経験しているがまだ召喚獣の操作にまだ不慣れなところがある。だがそれにも関わらず今こうして秀吉

が優勢を保っていられるのは明久、夢希が秀吉の動きを観察しているからだ」

「え？、そ、それじゃ・・・」

「そうだ、夢希が観察をやめ攻勢に出たら間違いなく形勢は逆転するだろうな、お前との特訓をして召喚獣の操作性が上がったとしても所詮付け焼き刃でしかない。それに体力面精神面に関してもまずいしな」

「そうよ、どうして木下はあそこまで体力を消耗しているの？攻勢に出て優勢なのに」

「忘れたのか？島田、決戦ギリギリまで秀吉は夢希との点数差を少しでも埋めるために鉄人の特別補習を受けた上に明久との召喚獣の操作の特訓までやっているんだ。家に帰ったとしてもすぐにまた出て試験を受けた身だ、ろくに体力は回復できてはいないはずだ。そして今攻勢にうつて上手くカウンターを喰らわないようにいつも以上の集中力を出してやってるんだ精神的にも疲れは出てくる」

雄二がそう説明すると周囲はさっきまでとはうって変わって静まり返っていた。いやな空気がFクラスに流れようとしていた

Fクラス戦その3（後書き）

今後もよろしくお願いします^^

Fクラス戦その4

戦いの形勢は雄二が予想していた通り、秀吉の動きを観察していた夢希がそれをやめ

攻勢に転じると一気に形勢は逆転し秀吉は押され始めていた

「ま、まずいよ雄二……、このままだと秀吉が！」

「わかっている！、が俺たちにはどうすることもできない……ここまでよく善戦したんだ、よくやったものじゃないか」

夢希 Side

時間をかけて秀吉君の召喚獣の動きを観察することに専念していたおかげで、召喚獣の動きは今のところ見切っている。

そして、私との点数の差を埋めるために無理をしてしまったため体力を消耗してしまったのか反撃する余力がないのか防御に徹している。

防御の上から攻撃を加えてるとよろける場面があった。

秀吉君の召喚獣の目をみると疲労してみえた。

召喚者と召喚獣はリンクしているため召喚者の表情がそのまま召喚獣に現れるので、召喚者の様子がわかるということ。

…つまり今、秀吉君は体力的に疲弊しているということ、それも防御してよろける位の

ならばここで勝負を決めようと私は自分の召喚獣を秀吉君の召喚獣に向かって翔らせた、決着をつける一撃を入れるために！

教室内にいた者達はこれで勝負に決着がついたと見ていた

そう、皆がそう「見ていた」・・・

秀吉の召喚獣に向かって駆け出す夢希の召喚獣

俯いて表情はわからないが立っているのがやっとに見える秀吉の召喚獣

そして

秀吉の召喚獣に接近し、勝負を決めるべく回し蹴りを放つ！

その時

回し蹴りを放つ瞬間、夢希は我が目を疑った。

さっきまで、疲労で生気のない目をしていたはずの秀吉の召喚獣の目が

生気のある目になっていたことに。

次に夢希の目に映っていたのは、回し蹴りを回避され秀吉の召喚獣の攻撃をまともに受け

横に飛ばされる自身の召喚獣の姿だった

FクラスSide

おおおおおおお！！とクラス内に驚きと共に歓声が上がった。

それもそうだろう、もうこれで終わったと思っていたところに予想外の展開が起きたのだから

Aクラス 霧島夢希
211点

VS

Fクラス 木下秀吉
198点

「すごいよ秀吉！でもどうしていきなりあんな生きた攻撃が出来たんだろう？さっきまであんなに立つのがやっとに見えたのに」

「・・・見えた」・・・そうか！そういうことか！やってくれるぜ！秀吉のやつ！」

「え？どういうこと？雄二？」

「どういうことなの？坂本？」

「どういうことなんですか？教えてください坂本君」

意味がわからない明久、美波、瑞希は声を揃えて雄二に聞いた

「なんだわからないのか？」

おい明久、秀吉の特技は何か忘れたのか？」

「忘れるわけじゃないか！そんなの「演技」に決まってるじゃないか！秀吉は演劇部期待のホープ……、ってまさか！？」

「やっと気がついたか？そう、秀吉のやつ今まで「演技」してやがったのさ。死んだふりついていえばいいか、全く俺たちを含めこの教室内にいる全員を見事に騙すとな」

「今までのあれ全部演技だったの？ウチは全然気がつかなかった！」

「すごいです、木下君……」

秀吉Side

「な、なんとか上手くいったのじゃ。」

少々卑怯な手ではあったが夢希の召喚獣に確実に重い一撃を入れるにはワシにはああするほかがなかった。

明久との特訓で多少召喚獣の動きがよくなったがそれでも明久ほど動きが早くなったわけではない。かといって姫路やムツツリー二のように強力な攻撃をもっているわけでもない。

そんなワシの武器はただひとつ！演劇で培ってきた演技力がワシの武器じゃ！この唯一の武器でこの戦い必ず勝つのじゃ！

Fクラス戦その5

思わぬ反撃を受け一瞬咄然とした夢希であったがすぐに意識を取り戻し、瞬時に秀吉の召喚獣との間合いを取り体勢を整えた

そしてもう一度戦いの流れを自分のほうに引き戻そうと攻撃を仕掛けるがさつきとはまるで別人のように平然とした顔つきで攻撃を避ける秀吉の召喚獣がそこにいた

夢希Side

完全にしてやられた！今までのあれは演技だったということをあの一撃を喰らうまでわからなかった！

今こうしてこちらの攻撃を難なく避けるこの姿がなによりもの証拠だ

おそらく私が観察している時に向こうも私の動きをよく見ていたのだろう

観察していると思っていたら逆に私のほうも観察されているなんて・
・

でもなんだろう・・・この感じ

秀吉君に上手くやられてピンチのはずなのに・・・

なんだかとても

すごく楽しい！本来ならクラスの施設やプライドを賭けた大事な戦いなんだけど、今この時だけはそんなこと抜きでこの時間を楽しみたい！

そうか、これが愛子が言ってた「楽しむ」ってことなんだ

AクラスSide

今Aクラスは騒然としていた。楽勝で終わるかと思っていた戦いが思わぬ展開がおきそして今形勢が逆転しようとしているからだ

だがここにきてもとある三人は慌てることなく落ち着いていた

「やってくれるわね、あのバカ。あの戦いの最中で演技してたなんてね、全くその努力を勉強のほうにも廻しなさいっての」

「アハハ、でもこの試合のために弟君すごく頑張っていたじゃん？これ終わったらちよつとは褒めてあげたら？お姉ちゃん？」

「ま、まあ確かにあのバカにしては頑張ってたみたいね、っていうかお姉ちゃんいうな」

「…優子は相変わらずのシンデレ。少しは素直になったほうがいい」

「だ、代表までなにいつてるんですか！？それに私はシンデレなんかじゃありません！？」

「……こんな風に二人で優子をいじっているくらい落ち着いていた……」

「まあ、優子で遊ぶのもこのへんにしてっと。夢希いい顔になったね」

「全く二人とも人をおもちやに、・・たぶん余計な考えがなくなつて逆に集中できるようになったんでしょ」

「…本当に。夢希今とっても生き生きしてる」

FクラスSide

騒然としているAクラスとは違って変わってFクラスは歓喜で沸いていた

さっきまでの絶望的な状況から一転して反撃転じそして今向こうの攻撃を苦もなく避けているその姿は余裕の姿と見られた

「一時はどうなるかと思っただけでなんとかいい感じで木下が巻き返したわね」

「はい、なんだか余裕すら感じられるのでいけるかもしれませんね！」

「さて、そいつはわからんぞ姫路」

目の前で行われている戦いをじつくりと見ながら雄二がそう応えた

「うん？　どういうこと雄二？　あんなに余裕すら窺えるくらいうまく攻撃をかわしてるのに？」

今見ている状況を否定するかのような雄二の発言に不思議そうに明久は質問した

「確かに余裕を持って避けるように見えるがそれがさっきと同じようにこれもまた「演技」だとしたらどうする？」

「え？　それどういうこと雄二？　どうして余裕ある風に「演技」しなきゃいけないの？」

「夢希に奇襲するために行ったあの「演技」だがあそこにいくまでに秀吉の奴がかなりの精神力と体力を削っていたらどうする？」

「それじゃあ今のあの秀吉は余裕を装って手を休め回復に努めている、と？」

「まあ俺の推測に過ぎんがな。だがあの一撃以降秀吉は夢希からの攻撃を回避するだけに専念しているのは確かだ」

雄二の言ったことを照らし合わせるように行われている戦を目を凝らして見てみる

よく見ると確かに秀吉の召喚獣の表情は余裕そのものなのだけどそれを操作している秀吉は表情は変わっていないが少なからず汗をかいていた

戦いのほうは秀吉が表情を変えたりとフェイントを織り交ぜ向こうの攻撃に合わせて小出しのカウンターで徐々に点数を減らしていた

このまま流れが秀吉のほうに傾くかと思っていた時、妹さんの動きが変わった！秀吉の動きを警戒しながらの攻撃から勢いのいい攻撃のスタイルに変わった

それはカウンターをもらってもいいくらいそれくらいおもいつきのよいものだった

「ねえ雄二？なんか妹さん動きがよくなったように見えるんだけど？」

「そうだろうな、あいつの顔を見ればわかる」

そう言われて見てみると

「笑ってる？」

そう、それは本当に楽しそうな笑顔だった

「おそらくあいつの中にあつた余計な考えが吹っ飛んでこの試合を楽しむだけ考えるようになったんだろう」

「それってまずいことかな？やっぱり……？」

「ああ、かなりな。カウンターもらつ気で突っ込んでくる奴に「演技」やフェイントなんざなんの効果もないからな」

まずいよ……まずいよ……と狼狽する明久をよそに雄二は秀吉のほうを見るとにやりと笑つと

「明久、どうやら秀吉もそうするつもりのようだぞ？」

「え？」

雄二にそう言われ秀吉のほうを向くとそこには

さっきまでとは別人のように顔を綻ばせて自身の召喚獣を突っ込ませる秀吉がそこにいた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9224t/>

私と姉さんと召喚獣

2011年11月9日00時02分発行